2006年度テーマ講義「海の東アジア」

2006年度冬学期
東京大学教養学部前期課程

EALAI・「東アジア海域交流」テーマ講義

# 海の東アジア
## 海域交流から見た日本
## 報告集

東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

East Asia Liberal Arts Initiative

東アジア・リベラルアーツ・イニシアティブ（EALAI）

# ＜にんぷろ＞とは

今回のテーマ講義「海の東アジア―海域交流から見た日本」を EALAI とともに企画・運営したのは、科学研究費補助金の特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成―寧波を焦点とする学際的創生」、内輪で「寧波プロジェクト」と呼び、さらにこれを縮めて＜にんぷろ＞と称している組織です。これは東大に所属する組織ではなく、文部科学省から認められた５カ年計画（2005-2009 年度）の共同研究であり、日本全国の大学・博物館から総勢約 200 名の分担者・協力者を得て進められています。

＜にんぷろ＞には 34 の研究班があって、個別の研究テーマをかかえていますが、研究班相互に連携して、あるいはその構成員が個々に他の班員と協力して、さまざまな活動を展開しています。今回のテーマ講義にあたっては、EALAI 事務局を担当する一方で＜にんぷろ＞総括班の渉外担当でもある齋藤希史助教授が橋渡し役になり、＜にんぷろ＞領域代表の小島が共同でコーディネーターを務めるかたちで、東大関係者有志を講師に募って実現しました。

＜にんぷろ＞HP には各種行事のお知らせが掲載されていますので、ぜひご覧下さい。下記にアドレスを記しますが、（驚くべきことに）ネット検索キーワード「にんぷろ」ですぐに出てきます。＜にんぷろ＞という呼び名を仲間内の符牒にするつもりだった私としては、ちょっと複雑な心境です。

＜にんぷろ＞代表　小島毅
＜にんぷろ＞ウェブサイト：http://www.l.u-tokyo.ac.jp/maritime/
メール：ningbo@l.u-tokyo.ac.jp
Tel & Fax ：03-5841-1518

# EALAI とは

リベラルアーツ教育（教養教育）は、幅広くバランスのとれた知の獲得をめざす東京大学の教育の柱となっています。EALAI（East Asia Liberal Arts Initiative）は、リベラルアーツ教育の東アジアへの国際展開を目指す活動を行っています。北京大学、ソウル大学校、ベトナム国家大学ハノイ校と東アジア四大学フォーラムを毎年開催し、東アジアにおける共通教養教育の可能性を追求しています。また、南京大学では表象文化論集中講義をはじめ、リベラルアーツ教育プログラムを実施しています。さらに「教養のためのブックガイド」の中国語、韓国語、ベトナム語版を出版するなどの発信事業を展開しています。

EALAI のもうひとつの大事な事業は、東アジアからの着信です。それが各国の代表的な研究者をお招きし、いま我々にとって重要なテーマについて語っていただく、このテーマ講義です。＜にんぷろ＞との共同で開講された本講義は、より広いアジアからの着信という意味で、また東京大学の豊かなアジア研究の成果を、リベラルアーツ教育に還元するという意味でも、画期的なプログラムとなりました。いま私たちにとって、なにが大事なのか、なにを見つめ、なにを聞き、どう考え、行動すればよいのか。本講義の授業アンケートからは、学生の皆さんのたしかな知的な興奮が伝わってきます。刺激的な講義を組織して下さった小島毅先生・齋藤希史先生をはじめ、ご協力いただいた皆様に感謝いたします。

EALAI 執行委員会　刈間文俊

# テーマ講義「海の東アジア―海域交流から見た日本」について

このテーマ講義は「海の東アジア―海域交流から見た日本」と題して、2006年度冬学期に開講しました。東京大学東アジア・リベラル・アーツ・イニシアティブ(East Asia Liberal Arts Initiative, 略称EALAI）と、文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成―寧波を焦点とする学際的創生（寧波プロジェクトNingbo Project、愛称＜にんぷろ＞)」とが共同で企画・運営しました。＜にんぷろ＞構成員である東大教員・東大OBを中心に、中国からの短期招聘研究者にも講師になってもらって、全13回の授業をおこないました。

この授業の趣旨は、教養学部ジュニア（１・２年生）の諸君に、高校や予備校での日本史・世界史の授業内容とはちがった、現在の研究の最先端にふれてもらい、「東アジア海域」という考え方に対する認識を深めてもらうことにありました。

日本と大陸との関わりの歴史というと、古代の国造りの時期における朝鮮半島からの影響や遣隋使・遣唐使による律令制度導入といった話題のあとは、近代になってからの国際関係や不幸な戦争の歴史が語られるだけで、その中間の時期についてはあまり注目されてきませんでした。＜にんぷろ＞は、まさにその時期、西暦10世紀から19世紀までの約一千年間を対象に、日本が決して孤立して存在していたわけではないことをさまざまな分野から示し、「日本伝統文化の形成」におけるこの時期の東アジア海域交流の重要性を強調することに主眼を置いています。

そもそも＜にんぷろ＞に参加している研究者は皆、それぞれに文脈・背景を異にしながらも、これまでに確立してきた研究枠組みにあきたらず、新しい視点で日本の歴史や文化を見直そうという意欲をもっています。この授業では各人のそうした思いを若い学生諸君に提示し、学生諸君が今後東大で何を勉強するか選択する際の参考になれば、また、それぞれが進学振り分け後に進んだ専攻分野で専門的な勉学をするときに何か役立つものになればと思って開講しました。

月曜の午前という、授業にはあまり向かない時間帯（？）であったにもかかわらず、毎回約50人の受講者を得て、専門的な内容をわかりやすく話す授業が展開されました。毎回書いてもらう授業アンケートでも（外交辞令として多少は割り引いたほうがよいのでしょうが)「おもしろかった」「今まで知らなかった」という感想が多く、講義する側も「やってよかった」と思っています。

先行して開講されているいくつかのテーマ講義と同じく、この授業も一回かぎりにせずに、今後も継続させていくつもりです。今回とはまたちがう講師陣によって、今回とは具体的内容を違えながらも、以上の趣旨、以上の方針に立って、「日本史」でも「世界史（＝外国史)」でもない、「東アジアのなかの日本の歴史」とでもいうべき授業を開講していくつもりです。

2007年２月18日（東アジアの暦で正月元日）

コーディネーター　　小島　毅
（人文社会系研究科次世代人文学開発センター・助教授）

## About the subject of lecture
## "The Sea of East Asia – Japan from the view of Maritime cross-cultural Exchange"

February 18, 2007 (the New Year's Day in East Asia's calendar)
Coordinator: KOJIMA Tsuyoshi, Associate professor of Graduate School of Humanities and Sociology, the University of Tokyo

This lecture entitled "The Sea of East Asia – Japan from the view of Maritime cross-cultural Exchange" has held in 2006 winter term. This project's plan and management was cooperated with East Asia Liberal Arts Initiative (EALAI) and Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology Grant- in- Aid for Specific Research of Priority Areas, Maritime cross-cultural Exchange in East Asia and the Formation of Japanese Traditional Culture –Interdisciplinary Approach Focusing on Ningbo– (Ningbo Project, nickname: Ningpro). The lecture had held 13 times by the teachers mainly from the University of Tokyo and OB who are the members of Ningpro and others were the short-term invitation scholars from China.

These lecture's purpose is to have junior students in general education curriculum to perceive the forefront research and the necessary to lead of better understanding about "Maritime region in East Asia". Not by the contents of Japan and World history from the text books in high school nor cramming school.

It had not attracted attention to the middle term of the relationship between Japan and China (and Korea). It was mentioned when the formation of the Japanese state had influenced by Korean peninsula in ancient period either the state formed under a set of legal codes imported by Japanese envoy to China during Sui and Tang dynasty, after that only told about international relationships and the unfortunate history of war in modern period. "Ningpro" just focus on the 1000 years through 10th-19$^{th}$ century to indicate by various fields that Japan was not isolated existence from other countries, and to emphasize the importance of maritime cross-cultural exchange in East Asia during the period in "the formation of traditional Japanese culture".

The every lecture had about 50 students in spite of the seminar hold on Monday's morning (may be it was not suitable).The students filled out the questionnaire in each lectures (almost include compliment words) said "It was interesting" or "I didn't know yet" and so on, and the teachers thought that we may have done it.

We are going to continue this lecture as few of precedence lectures. Hereafter we would like to have it in difficult contents by other teachers. The program will neither the history of Japan nor World (foreign countries) history, but will be said like "The history of Japan in East Asia".

# 目次（授業構成）

第 1 回：ガイダンス　----------8
小島　毅（東京大学人文社会系研究科）
第 2 回：海域交流を見る視点----------10
小島　毅（東京大学人文社会系研究科）
第 3 回：儒教は日本に伝わったのか----------12
小島　毅（東京大学人文社会系研究科）
第 4 回：中世日本僧の海外渡航----------14
榎本　渉（東京大学人文社会系研究科）
第 5 回：詩の伝播　～東アジアの共通感覚～----------16
齋藤　希史（東京大学総合文化研究科）
第 6 回：東アジア近代化の礎
～明末清初における東アジア諸民族の西欧科学受容について～----------18
渡辺　純成（東京学芸大学教育学部）
第 7 回：宋代明州と日本平泉の友好往来----------20
林　士民（寧波市文物考古研究所）
第 8 回：宋代明州の地方志に見る中日経済交流の記録----------22
方　祖猷（寧波大学）
王陽明と中・日・韓３国の民族性----------22
銭　明（浙江省社会科学院）
第 9 回：列島・半島・大陸の船----------24
安達　裕之（東京大学総合文化研究科）
第 10 回：日本におけるジャンクの導入----------26
安達　裕之（東京大学総合文化研究科）
第 11 回：雪舟・若冲と東アジア ----------28
板倉　聖哲（東京大学東洋文化研究所）
第 12 回：菅原道真と東アジア ----------30
保立　道久（東京大学史料編纂所）
第 13 回：まとめ----------32
小島　毅（東京大学人文社会系研究科）

“Maritime in East Asia – Japan from the view of Maritime cross-cultural Exchange ”

Contents

Lecture 1: Guidance
KOJIMA Tsuyoshi, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo
Lecture 2: “The viewpoint of maritime cross-cultural exchange”
KOJIMA Tsuyoshi, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo
Lecture 3: “Has Confucianism come down to Japan?”
KOJIMA Tsuyoshi, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo
Lecture 4: “Oversea studies of the Japanese monks in China ”
ENOMOTO Wataru, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo
Lecture 5: “The diffusion of Poet – the common sense in East Asia-“
SAITO Mareshi, College of Art and Science, The University of Tokyo
Lecture 6: “The foundation of modernity – the receptive of Europe science by the East Asian in late Ming and early Qing era”
WATANABE Jyunsei, Faculty of Education, Tokyo Gakugei University
Lecture 7: “The thoroughfare between Mingzhou(明州) of Song China and Hiraizumi (平泉) of Japan”
LIN Shimin, Institute of Cultural Relics and Archeology of Ningbo Provincial
Lecture 8: “The records of economical exchange in Mingzhou(明州) regional document in Song China”
FANG Zuyou, Ningbo University
“Wang Yangmin and the nationality of China, Japan and Korea” Qian Ming, Zhejiang academy of Social Sciences
Lecture 9: “The Ship of Japan ,Korea and China”
ADACHI Hiroyuki, College of Art and Science, The University of Tokyo
Lecture 10: “Introduction of the Junk into Japan”
ADACHI Hiroyuki, College of Art and Science, The University of Tokyo
Lecture 11: “SESSHU, JAKUCHU and East Asia”
ITAKURA Masaaki, Institute of Oriental Culture, The University of Tokyo
Lecture 12: “SUGAWARA No Michizane and East Asia”
HOTATE Michihisa, The Historiographical Institute, The University of Tokyo
Lecture 13: Organization
KOJIMA Tsuyoshi, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo

# 講師紹介

小島　毅（こじま・つよし）

東京大学人文社会系研究科助教授。研究テーマは、東アジアにおいて儒教が果たした政治的・社会的役割、特に朱子学（近世儒教）のなかで礼教がどのように展開したかについて。また、儒教にもとづく王権理論の構造分析を進めている。講義に関連する著作として、『義経の東アジア』（勉誠出版、2005 年）、（編著）『義経から一豊へ　大河ドラマを海域にひらく』勉誠出版、2006 年）、『東アジアの儒教と礼』（山川出版社、2004 年）、『近代日本の陽明学』（講談社、2006 年）、『海からみた歴史と伝統―遣唐使・倭寇・儒教』（勉誠出版、2006 年）がある。

榎本　渉（えのもと・わたる）

東京大学人文社会系研究科日本史学研究室研究員。9～14 世紀における東シナ海の交流、特に日宋・日元間の貿易・文化交流に関して研究を進めている。講義に関連する著作として「宋代の「日本商人」の再検討」（『史学雑誌』110-2、2001 年）、「元末内乱期の日元交通」（『東洋学報』84-1、2002 年）、「中国史料に見える中世日本の度牒」（『禅学研究』82、2004 年）がある。

齋藤　希史（さいとう・まれし）

東京大学大学院総合文化研究科助教授。専門は中国古典文学および近代東アジアの言語・文学・出版。講義に関連する著作として、『漢文脈の近代』（名古屋大学出版会、2005 年）、（編著）『日本を意識する　東大駒場連続講義』（講談社選書メチエ、2005 年）、『漢文脈と近代日本』（NHK ブックス、2007 年）がある。

渡辺　純成（わたなべ・じゅんせい）

東京学芸大学教育学部助手。専門は東アジア科学史。清朝の第一公用言語である満洲語で著された科学技術文献は、清初のイエズス会士が東アジアに西洋科学を紹介した経緯を調べる上で必須であり、そのため、満洲語自然科学文献の内容を組織的に調べている。講義の関連著作として、「満洲語のユークリッド―東洋文庫所蔵の満文『算法原本』―」（『満族史研究』３、2004 年）、「満洲語医学書『格体全録』について」（『満族史研究』４、2005 年）、「満洲語自然科学術語について」（『アルタイ語研究』１、2006 年）がある。

林　士民（Lin・Shimin）

寧波市文物考古研究所教授。専門は歴史考古学。寧波史に関しても、陶磁器をはじめとする考古学の側面から研究を進めている。寧波史に関連する著作として、『三江変遷－寧波城市発展史話』（寧波出版社、2002 年）、『万里絲路―寧波与海上絲綢之路』（沈建国氏と共著、寧波出版社、2002 年）がある。

楊　建華（Yang・Jianhua）

寧波大学外語学院日語系講師。専門は日本語教育。

方　祖猷（Fang・Zuyou）
寧波大学元教授。現在、同大学伝播与芸術学院浙東学術浙東仏学研究室負責人。中国を代表する陽明学・清代浙東学派の研究者。代表的著作として『万斯同年譜』（陳訓慈との共著。中文大学出版社、1991 年）・『清初浙東学派論叢』（台北：万巻楼図書公司、1996 年）・『万斯同評伝』（南京大学出版社、1996 年）、『王畿評伝』（南京大学出版社、2001 年）がある。

銭　明（Qian・Ming）
浙江省社会科学院哲学研究所研究員。専門は陽明学を中心とする中国明清時代および日本近世の思想文化。著書に『陽明学的形成与発展』（江蘇古籍出版社、2002 年）がある。また、岡田武彦『王陽明与明末儒学』（呉光らとの共訳。上海古籍出版社、2000 年）などの翻訳を通じて、日本における明代思想研究を精力的に中国に紹介している。

安達　裕之（あだち・ひろゆき）
東京大学総合文化研究科教授。専門は日本造船史。
講義の関連著作としては、『異様の船－洋式船導入と鎖国体制－』（平凡社、1995 年）、『日本の船　和船編』（船の科学館、1998 年）、「日本の船の発達史への一考察」（『海事史研究』第 54 号、1997 年）、「白と黒－船の場合－」（同上、第 55 号、1998 年）、「大渡考－弁才船の帆装と操帆法－」（同上、第 59 号、2002 年）がある。

板倉　聖哲（いたくら・まさあき）
東京大学東洋文化研究所助教授。専門は、東アジアの絵画史、特に中国を中心とする。東アジア文化圏においてイメージがどのように共有され、差異化されたかを比較し、イメージの生成･伝播･受容の過程を追究している。個別の作品論としては南宋時代・明時代の画院画家たちの作品を継続して研究。講義の関連著作には、『故宮博物院４　明時代の絵画』（日本放送出版協会、1998 年）、『講座　日本美術史　第２巻　形態の伝承』（東京大学出版会、2005 年）、『「明代絵画と雪舟」展図録』（監修。根津美術館、2005 年）がある。

保立　道久（ほたて・みちひさ）
東京大学史料編纂所教授。専門は平安・鎌倉時代史。民衆意識論、絵画史料論、王権論などを中心に研究を進めてきた。ユーラシアの西から東の全体を時代区分すること、社会構造論、歴史理論の問題にも関心がある。講義の関連著作としては、『平安王朝』（岩波新書、1996 年）、『黄金国家―東アジアと平安日本』（青木書店、2004 年）がある。そのほか、近著として『歴史学をみつめ直す―封建制概念の放棄』（校倉書房、2004 年）、『義経の登場』（日本放送出版協会、2004 年）。

# 開講の趣旨

小島毅

第１回：2006 年 10 月 16 日（月）

## 講義内容

### *東アジア海域の窓口～寧波～*

「日本人固有の視座に立って中国研究を進めつつ、また同時に日本文化そのものを再考しよう」。そうした研究を試みる上で重要なカギとなるのが、東アジア海域の窓としての都市寧波である。寧波は、「ニンポー」という慣用読みの歴史が相当に古いことが示すように、日本人にとっては比較的なじみのある都市である。偶然にも、近年の大学入試センター試験の日本史の問題で、いわゆる「寧波の乱」に関連して、寧波の地図上の位置を選択させる問いが出題された。寧波という存在が、日本史を考える上で重要な一トピックであることを物語っているのではなかろうか。

### *なぜ海なのか*

近代における鉄道・自動車の導入以前にあっては、水運に大きな優越性があった。にもかかわらず、現代人の陸地中心的な感覚によって、海運やそれによって結びつく海域の重要性が閑却に付されてきた。寧波を中心とする「陶磁器の道～セラミックロード～」の広がりは、そうした固定観念の見直しを迫るものである。

歴史学にあって、「海域」という枠組みの重要性をあらためて認識させたのはフェルナン・ブローデルの『地中海』であった。同著において示された、地中海をとりかこむヨーロッパ南部とアフリカ北岸の一体的なありようは、日本人にとっての「隔てる」存在としての海とは大きく異なるものであった。これは、「海」という視座が歴史学にもたらす可能性を示唆するものである。中国史の分野でも「海」の視点に立つ研究は着実に進められている。上田信『海と帝国―明清時代』（講談社、中国の歴史 09）はその成果の一つである。

### *いま東アジアの視点で歴史を語る時事的必要性*

〈大きな物語〉の枠組みが崩れたいま、歴史学はその方向性を模索している最中であり、それぞれの分野で精緻な実証研究を進めていくだけでよいのかどうかも問われている。例えば、現在の東アジア諸国家間における最も微妙な問題である「歴史認識問題」について、歴史研究を通じてどのような貢献を果しうるだろうか？　日本人にとって、中国とは「圧倒的な他者」「忘れえぬ他者」としての存在であり続けた。その中国についての日本人の認識、すなわち過大評価と過小評価の間を揺れ動き続けた対中観を、「東アジア」の視座から問いなおすことはできないだろうか。

ことは自己認識としての「日本像」についても同様である。日本が自然発生的に日本なのではなく、その「日本」という呼号の成立一つをとっても、西暦７世紀前後の対外関係の中で選定された国号なのである。中国にせよ、日本にせよ、東アジアの枠組みの中で営まれてきた歴史の一環として理解することが、歴史認識問題――国民国家の物語どうしの対立・衝突――の背後にある一国史的な自他認識を克服する手がかりとなるであろう。

### *「日中交流史」から一歩踏み出すこと*

「海の東アジア」はいわゆる「日中交流史」的な理解をふみこえることを目指している。遣唐使廃止から（894）から日清戦争（1894）までの時期は、日中相互の関係が語られることが相対的には少ない時期である。この時期の交流を語るには、政府の公文書が残る形式での交流が少ないという史料的制約が存在する。そのような制約を克服する一つの手がかりは、現在にまで残された具体的な「モノ」であり、陶磁器・美術・船舶といった講義テーマは、非文書的な形での交流の様相を、具体的にわれわれに提示してくれるだろう。

「海の東アジア」の各講義は、海域交流のテーマを扱いながら、いわゆる「伝統」というものがどのように形成されてきたかを把握しようとするところに共通した関心を置く。ただ、各講師の論ずる内容が緊密なつながりを持って統一的な東アジア交流史像をえがいていくといった態の連続講義ではない。むしろ互いに食い違いさえ見せるかもしれないほどに多様な交流の像を、「海域」「東アジア」について考える素材として、学生諸君に提供したいと考えている。

（文責：新田）

## 講義アンケートから

「『東アジア』の視点で歴史を語る」というキーワードに大変興味を憶えました。この講義を通じて、東アジアの中で日本はどうだったのか？東アジアとはどんな世界だったのか？そういった疑問が解決されることを期待しています。（文Ⅱ・2年）

二年生になって、やっと自ら学ぶ姿勢の大切さについて少しずつ気づかされてきた。一年生の時はゼミも何も知らず、ただ講師の言葉をノートに写すだけの受動的なものだった。「ただ話を聞くのではなく、それらの知識をふまえて自分がどうするかを目的とする」という話を聞いて、毎回うけようと思った。昔から歴史は好きだったがはじめて主体的に学べる気がする。（文Ⅲ・2年）

国民国家による自分達中心の物語としての歴史、個別実証研究それに文書研究を中心とした歴史などの行きづまりから、歴史学が転換期にあることを痛感した。（文Ⅰ・1年）

日本史に興味があって聴いてみたのですが、高校までの日本史とは違った視点に気付かされてとても興味深かったです。遣唐使廃止後、日本と東アジアがどのように関わっていたか･についていろいろと知ることができるのを期待しています。今はまだ授業の内容に関する予備知識などがほとんどないので、毎回の講義を通して自分でいろいろ考えていきたいと思います。（文Ⅰ・1年）

日本と外国を隔てる海→つなぐ海という発想は新鮮でした。現代では外国＝海外という意識が定着していますが、昔から人々の意識の中にそれがあったのだろうか、などと考えました。例えば江戸時代は他藩に対して強い「外国意識」があった、と聞きます。西日本、特に対馬などでは日本の他藩よりも朝鮮の方が近い存在だったのかもしれません。いろいろと興味がわいてきました。楽しみにしています。（文Ⅱ・1年）

シルクロードの方がよく聞くから、そちらの方がメインだと思っていたけど、セラミックロードの方が重要であったかもしれないなと思った。私は東アジアにとても興味があるので、これからがとても楽しみです。日中関係の改善が歴史の観点からなされたらいいと思う。（文Ⅱ・1年）

開講の趣旨がわかった。最近まで、日本人は「日本人」という一つの枠組みとしてしかとらえられてこなかった。しかし、日本人を他の視点からとらえるとその枠組みを越えた別のとらえ方もできる。この授業では海、歴史を介して日本人、また東アジアを見ていく講義だとわかった。海はたしかに陸とは違いきちんとした境界をひけないあいまいなもので、扱いにくいものだったとろうが、交易という点ではむしろとても説明しやすいものだと思う。（理Ⅰ・1年）

# 海域交流を見る視点

小島　毅

第2回：2006年10月23日（月）

## 講義内容

### *前回のアンケートへの回答*

「日本史を高校でやってこなかった人でもこの授業は理解できるか？」という質問があったけれども、これはどちらとも言えない。日本史をやっていたからわかる、やっていなかったからわからないというものでもないので、わからないところは自分で調べるなり、RA・TAに訊ねるなりしてほしい。

海だけでなく河や湖も重要なのではないかという質問があった。当然船に着目するときは河や湖も視野に入るので、それらも含めた意味で「海」という言葉をこの授業では用いていきたいと思っている。そもそもこの授業で扱う寧波自体、河と運河の結節点なので、そのように緩やかな定義を許容されたい。

なお「にんぷろ」（寧波プロジェクト）について質問もあったが、これは科学研究費の特定領域研究で、この授業のHPからも入れるので、参照されたい。

### *寧波*

寧波ははじめ明州と言い、慶元と呼ばれていた時期もあるが、その後寧波というようになった。直接海岸線に面しているわけではなく、地図で見られるように内陸に河を遡って入ったところにあり、運河で北京とつながっていた。九州に向き合う位置にある寧波は、日本から出た貿易船が到着する港町であった。17世紀以後の長崎貿易において、実際に寧波から来た船でなくとも寧波船と呼ばれるほど、日本にとって寧波は馴染みの深い町だった。しかし19世紀に船の大型化が起こると、河を遡上しなければならない寧波の役割は終わって、上海に船が集まるようになった。

### *日宋交流*

遣唐使の「廃止」後、日本と中国の貿易は途絶えたわけではないが、外交関係がなくなったことで、両国の交流は記録に残りにくくなった。ただし、断片的な史料からわかることは、国家使節の派遣がなくなった後でも、むしろ8世紀に比べて10世紀・11世紀の方が貿易船の往来が盛んだったと推測されるほか、日本から多くの仏僧が五台山や天台山に巡礼に渡っていたことである。平安・鎌倉時代に圧倒的な勢力をもっていた天台宗の僧侶にとって、天台山詣では箔付けとして価値あるものだった。栄西が二度目の入宋のときに臨済禅を伝えたということになっているが、これも仏僧の巡礼がパターン化していたことを背景としており、彼は禅を学びに留学したわけではなかった（ちなみに道元は最初から禅を学ぶ目的で渡海したが、曹洞禅を学びに行ったわけではなかった）。

### *日明貿易と日本の伝統文化形成*

両国の貿易が国によって統制されない時代には、倭寇が活躍したことが知られるが、再び中国との国交関係を回復したのが足利義満である。足利義満は明に使節を派遣して明の皇帝から「日本国王」に冊封されたことで、中国に対し臣従することを快く思わない向きより評判がよくなかった。しかし、元の滅亡という世界史的事件につづく新しい東アジア国際秩序への順応としてこの問題はとらえられるべきである。この時期、朝鮮が誕生して明に冊封され、ベトナムでも越南が明に冊封された。日本もその東アジアの流れに乗ったものと見られる。

室町時代の日明貿易は歴史を見ていく上で重視されねばならない。遣明船は遣唐使よりも回数が多く、船も大きく、船の数も多かった。遣唐使の船が大陸につく確率が低かったのに対し、遣明船は成功率が高かった。次第に幕府の船よりも大名の船が行くようになり、1523年には寧波を舞台に大内氏と細川氏の戦闘が行われたことが、寧波の乱として知られている。大内氏が博多―寧波ルートを取ったのに対し、細川氏が堺―寧波ルートをたどったことから、この乱は博多商人と堺の商人との勢力争いでもあったと見られる。

遣明船が重視されねばならないのは、この時期に日本の＜伝統＞文化が形成され、日明の交流がこれに深く関与していたためである。これらは禅の僧侶が多く媒介をしている。禅や他の仏教宗派もこの時期再編されたものであり、茶道・書画などもこの時期に出来た。雪舟が大内氏の庇護をうけて寧波に行っていたことで知られるように、これらは寧波が窓口になっていた。つまり、「室町期における日本の＜伝統＞文化形成に中国文化の影響が見られる。」と言うにしても、それらは四川や広東からのものではなく、寧波を含む浙江省地域からの影響であったと言える。中国と言っても、ある特定の地域と日本は結びついていたのである。

（文責：池田）

## 講義アンケートから

寧波を中心に日中貿易が行なわれていたようですが、貿易高などによってそれを裏付ける資料はやはりないのですか？（文Ⅱ・2年）

史料からの情報を「誰が書いたのか」という点に留意して取り扱わねばならないことに興味を持った。様々な学説が聞けておもしろかった。（文Ⅱ・1年）

年表を見ながら、菅原道真の「廃止」の本当の意味や、栄西が入宋した理由、足利義満が東アジアの「国際秩序」に順応して「日本国王」に任じられた、ということを学べたのは楽しかったです。高校の日本史の授業ではなかなか細かいところを学べる機会が少なかったので。（文Ⅲ・1年）

遣唐使と遣明使の比較が興味深かった。遣明使が「重要」という話について、もう少し詳しく聞きたかった。（文Ⅲ・1年）

年表の書き方など歴史について「…ということになっている」としかとらえられないことが多いんだなあと思った。寧波まで川を 20km も逆のぼるのは大変ではないかと思った。どうしてもっと近い上海がはじめから栄えなかったのかなと思った。（文Ⅱ・1年）

日本は大まかに分けて中国から三つのものを得たと自分の中で考えてきた。時代の流れでいえば、国家のシステム・権威（国家使節経由））→宗教（僧侶）→文物（商人）。それら以外に、中国文化を日本へ伝えた担い手のグループは存在していたのだろうか？（文Ⅲ・2年）

日本に取り入れられた中国文化が寧波中心であるという事実は興味深かった。個人的には、蘇州の街並みには懐かしさを感じるが、北京の紫禁城や香港の街並みは強烈な異文化を感じる。（文Ⅲ・1年）

# 儒教は日本に伝わったのか

小島　毅

第3回：2006年10月30日（月）

## 講義内容

まず授業アンケートに対する回答を行い、最近問題となっている高校の教科履修について、受講者に感想を求めた。「海域」のように、日本史、世界史、倫理各教科に跨る課題を考える意味や、そもそも何のために勉強するのかということを念頭に置きつつ、儒教をめぐる海域交流について考察した。

### *儒教とは何か？*

展開：諸子百家の一つとして登場した儒家の教えは、やがて国教となるが、仏教、道教とともに三教鼎立の時代が続いた。11～12 世紀には朱子学が成立、以後それを批判する陽明学や考証学も登場する。諸学は脈々と並存し、東アジアに波及した。

儒教は宗教か？：日本では一般に儒教は宗教と見なされないが、キリスト教を基準とした「宗教」という概念（ローマ帝国におけるキリスト教を想定する「国教」も同様）で、歴史的文脈の異なる儒教を分析することに意義はあまりない。外来の概念よりも、三教、景教、回教といった「教」というカテゴリーの内容や、その各教並存状況に照らすほうが、「宗教」の再検討に有効かもしれない。本講義では、むしろ儒教から宗教を連想しない日本における儒教の「特異な性格」に注目し、分析を行なう。

儒教＝祭祀・儀礼：なぜなら、中国や朝鮮半島では、冠婚葬祭の規範こそが儒教であり、古くから『儀礼』、『文公家礼』など祭祀の手引書も存在する。しかし日本では、17 世紀に野中兼山が儒教式葬儀を導入しようとして、幕府から理解を得られず、キリシタン疑惑をかけられ失敗したり、日本に朱子学を広めたとされる林羅山が、禅僧の装束をしていたりするなど、異なった様相を見せていた。

### *儒教は日本に伝わったのか？*

このような儒教受容の相違は、日本の固有文化あるいは自立志向によるのだろうか？論者は、室町時代の日明貿易の特徴によると考える。

①室町幕府と臨済教団：鎌倉政権以降、漢文の文書作成を担ったのは禅僧である。室町時代には臨済宗の寺院が幕府権力と親密に結びつき、京都や鎌倉に禅寺五山が選定された。朱子学・陽明学を日本へ導入したのはその僧侶であった。仏僧にとって葬式は仏教の仕事であり、また朱子学の仏教批判は不都合でもあった。江戸幕府の寺請制度を経て、換骨奪胎した「葬式をしない儒教」が日本に定着した。

②遣唐使と遣明使の異同：いずれにも最新の仏教を学ぶ僧侶がいたのとは対照的に、遣唐使では菅原家など儒教を学ぶ専門家が派遣されたが、遣明使には儒者は同行せず、禅僧が大使の役割を果たした。日本国内の儒者は、中国を実見することなく、また儒教の最新動向（例えば陽明学の「礼」をめぐる諸言説）を摂取できていなかった。貿易港寧波が陽明学興隆の地でもあったことを考えると皮肉である。

③江戸後期の「学文」熱：「鎖国」により中国の学者が来日しない中、朱舜水来日の波紋で儒教が脚光を浴びた。水戸藩主が儒葬の導入を試みてはいたものの、全国的には仏葬の制度化が進んだ。一方、松平定信の寛政の改革期に起こった「学文（がくもん）」熱は『論語』や『孟子』の素読を社会に広めた。ただしそれは学問概念としての儒教の浸透であり、儒葬は結局根付かなかった。このように、朱子学導入で文臣官僚支配体制に進んだ朝鮮と、礼を導入せず武士階級支配体制を築いた日本の相違は、室町時代を契機として生じ、日本の「伝統」文化を形成したと考えられる。

（文責：小川）

## 講義アンケートから

儒教が日本に上手く受容されなかった事についての説明は新鮮でしたが、「儒教は本当に受容されなければならなかったのか？」という点については疑問があります。実際儒教を「儒教」として受け入れず、ある程度内容の良い部分（？）を上手くつまみ喰いする形で支配体制の確立に利用するという受容の仕方も、それはそれとして十分アリだと思うのですが。（文Ⅰ・2年）

昔、世界史、倫理などを学んだ時に一般に＜宗教＞だと言われる仏教・道教・キリスト教などと儒教の違いが気になっていたが、今回の授業で日本と中国・朝鮮の儒教の違いや、違いが生じた原因などを知って、そこらへんのもやもやがすっきりして納得できた。

『教』という概念は面白かった。でもキリスト教などの＜宗教＞に対して＜教＞を逆に適応させることに意味はあるのかは疑問だった。（文Ⅱ・1年）

中国五山をはじめて知った。中国では万寿寺は第1位なのに、日本では京都の第五位なのが興味深い。（文Ⅱ・1年）

儒教は日本に入り、日本化し、日本に順応していったのだと理解した。ただ、儒教の伝来の仕方を仏教の伝来の仕方ともっと比較して説明してもらえるともっとわかりやすかったと思う。（文Ⅱ・1年）

儒家はずっと学問だと思っていました。日常の道徳を学ぶというイメージがあったので、葬式がある、ということを知りませんでした。伝来と聞くと本家本元の教えがそのまま伝わったのだと思いがちでしたが、考えが少しかわりました。（文Ⅲ・1年）

何故日本に葬式が定着しなかったのかがわかりにくかったです。特に野中兼山のこと、又儒教と寧波、日本とのつながりは何なのでしょう。儒教が日本に関る上で寧波はどのような役割を演じたのですか？（文Ⅲ・1年）

儒教にも葬式があることを私は知りませんでした。この他にも色々知らなかったことが、今回の講義では多かったです。（理Ⅰ・1年）

# 中世日本僧の海外渡航

榎本　渉

第4回：2006年11月6日（月）

## 講義内容

### *日中外交関係と貿易*

838年に派遣された最後の遣唐使から1370年代の明使受け入れまでの約5世紀の間は、日中間に恒常的な公的使節の往来はなかった。しかし、実は遣唐使の20年1貢、遣明使の10年1貢という交流頻度の低さに比べると、公的使節ではない民間商船が往来していた9～14世紀の日中交流は活発であった。

### *日宋・日元貿易と文化交流*

宋元代の日中交流の主役は商人たちであり、彼らは公使と比べ自由度が高く、人の往来・文化交流も頻繁に深く行われた。特に貿易船に便乗する僧侶は南宋以来多く、僧侶を通じた文化輸入が中世文化に影響を与え続けていたことを看過してはならないだろう。新義律宗・禅宗・書籍・詩文・書画・医学・食文化等さまざまなものが挙げられる。その中でも、禅宗は師承関係を重視するため、日本僧が直接中国に渡るか中国僧が直接日本に来るかしなければ法統が継受されない。そして、日本禅宗59流のうち55流までが宋元代に伝わっているのである。

### *僧侶の往来*

木宮泰彦『日支交通史』（1926-27）によれば、日本僧の海外渡航は北宋のとき22名、南宋109名、元222名である。唐末から北宋時代、海外渡航には天皇の勅許が必要だったうえに渡航の機会も稀であり、983年から1086年では年平均0.13次という機会の少なさであった。それに比べ、1160年代以降渡航に勅許がなくなり、事実上放任となると、南宋時代で年平均1例、元代で3例と激増する。もちろんこれは文献に残されたもののみの計算であり、実際はもっと多かったと思われる。

### *古代日本の度牒・戒牒*

ところで、渡航した僧侶たちはみな度牒・戒牒という文書を携行していた。度牒・戒牒とは、僧侶が得度・受戒する際に国家から発行される公的な証明書で、年に何人と発行数が決まっていた（古代の仏教は鎮護国家の宗教であり僧侶は免役だったため、国家が僧侶を管理し、無断の得度は私度僧として処罰された）。その書式は『延喜式』で確認できるが、実際に発給された度牒を見ると、大量に作成するため木版で刷られ、必要箇所のみ手書きで記入されていたことがわかる。

### *入宋・入元僧の度牒*

しかし、入宋・入元した僧侶の度牒を見てみると、奇妙な点が見受けられる。1328年に入元した天岸慧広の度牒を見ると、当時の日本にはない中国風の官職名が書かれ、地名も中国風に書かれている。また偽物の太政官印が捺してあるほか、戒牒と比べると別の人名に同じ花押が用いられていた。つまりこれは偽文書で、日本国内では通用しないものであり、入元のために作られたものなのである。この点についてはいちはやく、伊藤東涯が『制度通』で喝破している。使用している紙も本物より立派で、大きな紙を使用している。

### *入宋・入元僧携帯度牒の変化*

日本僧が携行していた度牒については、中国側の史料にも記述が見られる。周密『癸辛雑識』に登場する定心という日本僧（13世紀初頭入宋）が携行していた度牒は正式な形式を備えており、正規の度牒であるようだが、日本の地名を中国風に表記している。また『弘治温州府志』『蘿山集』に出てくる日本僧（14世紀入元）のものは偽造度牒と見られる。以上をまとめると、13世紀初頭、本物の度牒に中国風の地名を表記する傾向が現れ、13世紀半ばには偽造度牒が登場する。初見は円爾（1235年入宋）の度牒で、形式の異なる二種類の度牒が残されている。以後元の最末期である1361年まで偽造と思われる度牒の使用が確認できる。

### *偽造度牒の必要性と歴史性*

ではなぜ、このような偽造度牒が横行したのだろうか。最後の遣唐使以後の入唐僧は国家から公的身分証明書を発給されていた。入唐僧はこれを中国の官府に提出して入国の手続きを行ったのである。ところが12世紀以降、朝廷は海外渡航を黙認するようになったため、公的身分証明書発給などの保護がなくなってしまった。しかし、僧たちはといえば、中国での入国・滞在・移動手続きの困難から、自ら公的書類を用意する必要があった。そして恐らく、中国での通用しやすさを考え、中国風の地名・官職名などを用いた偽造度牒が作り出されたものと思われる。日中の正式な国交がなかった以上、中国側が偽文書か否かを確かめることは不可能だったはずである。

こうした状況は、明の洪武帝による海禁＝朝貢システム構築により終焉した。公使以外の合法的な入明僧

は存在しないのであるから、私的渡海のための度牒偽造は不要になるのである。渡海僧が度牒を携行した 13 世紀初から 14 世紀半ばは入宋勅許の消滅から元朝の滅亡の時期に相当し、この時期にあらわれた偽造度牒は、私的渡航が認められた時代における歴史的産物だったと言えよう。

## 質疑応答

Q : 偽度牒の役所の名前が違うことについて中国側は不審を抱かなかったか。偽物は普通本物に似せるはずだが、これほど違うのはなぜか。
A : 中国側が日本の情報をどう蓄積していたかは不明。少しずつ変化したのではないかと思う。中国人は自国の書式と違う本物の日本度牒の方をむしろ疑ったのではないかと推測している。

Q :『延喜式』以後日本側の公的な書式は変わらなかったのか。また同時に複数の書式が使われると怪しまれたのではないか。むしろ同じ書式の偽度牒が大量に流通することで通用し、それがスタンダード化したのではないか。
A : 公的な書式も細かく変化はしているが大きな変更はなかったようである。

（文責 : 池田）

## 講義アンケートから

偽造度牒という全く未知のテーマでしたが、パワーポイントで史料を見せていただいて、興味がわきました。中世の僧が偽造度牒を作ってまで中国に渡る意義とは何だったのだろうと思いました。そのような僧で有名な人はいるのでしょうか。（文Ⅰ・1 年）

今日の度牒のお話を聞いて、このような偽造は古今東西で行われているのだなと思いました。しかし、僧という立場で偽造することにためらいはなかったのかという気もします。（文Ⅲ・1 年）

偽造度牒をつくる組織（禅宗寺院？）があったのでは？という話についてもっと知りたいなあと思いました。（文Ⅰ・1 年）

高校までの授業で扱う史料は大抵本物の文書だったが、偽文書を読み解くという作業はなかなかエキサイティングだと感じた。現在の偽造パスポートとはやや事情が異なるが、昔の人々が試行錯誤する様を調べてみるのはやはり面白い。（文Ⅱ・1 年）

遣唐使も遣明使も、頻度の少なさに驚いた。度牒がいまだにのこっているとは思わなかった。中国から持ち帰ったものも見てみたい。ニセモノだらけで面白い。当時の人は気付いていたのだろうか。そしてなぜ保存されていたのだろう。（理Ⅰ・1 年）

日本中世に於いて国内で偽文書が盛んに流通していたのは知っていたが、対外的にも偽文書が使われていたとは驚きである。あと本題ではないが、異国の地で毒キノコに当たって死んだ留学僧の話が心に残った。最近長安付近で日本人留学生の墓が発見されたが、そういったヒロイックな死に方だけでなく、こういうアホな事が原因で無念にも死んだ奴もいたにちがいない。文字で書きしるされた歴史のウラには、このような無数の人々の屍が埋まっているのだろう。（文Ⅲ・1 年）

国交がなく偽文書確認が出来ないにも関わらず、本物っぽいもの（中国風）を作ろうとしたことは、ある意味立派だと思います。日本の本物（日本風の書式）の方が逆に中国では偽物と疑われたのではないのか、という話は当時の中国人の華夷思想を反映しているような気がしました。（文Ⅲ・1 年）

高校までの日本史では、中国との交流があまりないと教えられていた時期に、僧たちは偽造度牒を作ってまで渡中していたのは、新鮮だった。これが日本の僧界にどのような影響を与えたのかということが大事だと思った。（文Ⅱ・1 年）

# 詩の伝播　～東アジアの共通感覚～

齋藤　希史

第5回：2006年11月13日（月）

## 講義内容

現代の我々が漢詩をイメージする場合、それは個人的な趣向や文学作品だと思いがちだが、前近代の東アジアでは、詩が社交、出世の道具として用いられ、公に披露されることを前提に作られていた。本講義では、このような東アジアの「共通感覚」としての詩のあり方に注目すると同時に、詩の導入過程で、時代や地域ごとに内容が微妙に異なることから、詩の示す世界観の多様性をも明らかにした。

### *手本と担い手*

中国の詩は古来より日本で読まれており、奈良・平安時代には『文選』や『白氏文集』が伝わり、貴族の教養と密接に結びついていたことは、清少納言の「香廬峰の雪」の逸話などでも有名である。一方、室町から江戸期にかけて読まれた南宋の周弼編『三体詩』や、江戸から明治期にかけて読まれた明の李攀龍編とされる『唐詩選』といった唐詩の注釈書の実像は、あまり知られていない。

これらの注釈書は、作家別ではなく詩の形式別に編纂されており、詩を書くための手本書であった。当時詩を読むことには、作詩の「感覚」を身に付け、公に披露するという具体的な目標が存在していた。

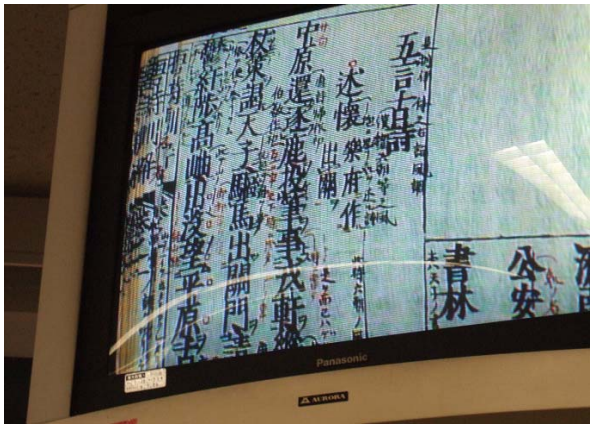
また、時代によってこれら注釈書の内容や、日本へ導入した担い手が異なることにも注目したい。『三体詩』は中・晩唐の167人の詩494首を収め、室町五山の僧侶によって伝えられた。一方、『唐詩選』は盛唐を主に128人の詩465首を収めるが、その中に著名な白居易を含まない。受容・伝播は17世紀ごろから、担い手は士族であった。前者の詩情が「平淡典雅・警抜華麗」と称され、素朴さや無常観を尊ぶ仏僧の趣向に合致していたのに対し、後者は復古的傾向を反映し、気宇壮大で浪漫的な味わいを持ち、「修身・斉家・治国・平天下」に代表される儒学的価値観を有した近世日本の士族の心性に合致していた。

盛唐詩を尊崇したのは、荻生徂徠や服部南郭であり、唐詩の原典を徹底して模倣するよう提唱した。その結果、作品に複数の作家の語句を重ねた模倣や、日本人には未経験の辺塞詩のムードの導入が散見する。このような古文辞派への反発から、日常性を強調した宋詩への注目もあったが、原典の語句を多用する模倣性は健在だった。

彼らは模倣をすることで実感を再生産し、時空を超えて詩情を共有できると考えたのかもしれない。

### *朝鮮通信使の事例*

朝鮮通信使とは李氏朝鮮から日本へ派遣された国使で、慶長12年から文化3年まで計12回渡来した。当時「鎖国」していた日本にとって、この朝鮮通信使と長崎に来る清客が、数少ない東アジア文化交流の機会であり、彼らとの筆談、書画の交換、詩の応酬を通じて、自らの詩作能力を試し、その筆跡を保管してグローバルなステータスを確保しようとする人は多かった。例えば、朝鮮通信使の李東郭と長崎通事の岡島冠山が交わした詩では、前者に辺塞詩の意識が、後者に韓愈や李白の名を用いた賛嘆の語が見られ、盛唐を基準とした世界観が共有されている。その一方で、李が日本人との交換を意識し、「富士山」を詩に盛り込んでいるのも興味深い。このように、漢詩・漢文による交歓は、盛唐詩の普遍的価値観へ自らが参入し、対話するという意味があった。そしてその共通感覚の中に、普遍性と固有性を相互に選択し接続しあう、漢字圏の複相性が存在していた。　（文責：小川）



## 講義アンケートから

文字を読めるということは昔の人たちにとっては限られた人だけの特権であり、ましてや先進国中国の言葉を使って詩を読んだり、作ったりできるというのはすごいステータスであったのだろうなと思う。（文Ⅰ・1年）

互いに影響をうけるものを選択して主体的に影響を受けあっているというのは非常に目新しく興味深かった。これは東アジアに特有なのか、という点は疑問に残った。（文Ⅱ・1年）

江戸時代の「鎖国」という言葉のイメージから程遠く、漢詩というコミュニケーションツールを駆使して一般教養人が国際的に交流していたという事例（朝鮮通信使）が興味深かった。（文Ⅲ・1年）

詩の交換を盛んに求める日本人に対して朝鮮通信使はお世辞抜きにどう思っていたのか興味があります。非中国人である朝鮮人は自らの漢詩をどう考えていたのか。本場の漢詩とかわらない精神を共有していると考えていたのか。日本人の漢詩を下に見ていたのか。日本人の漢詩も朝鮮人の漢詩も同じ東アジア世界の同じ文化として受け入れていたのか。（文Ⅲ・1年）

詩の持つ意味が、現代のそれとはだいぶ異なるものであったことが分かった。詩集が”読むため”だけでなく、詩の手本としてあったというのは興味深いと思った。研究を通して、昔のやりとりを今たどれるというのはすごいことだと思う。詩というたった1つの切り口でも、その時代の様々なものが見えてくることを感じた。（理Ⅰ・1年）

「社会的位相の接続」や、「選択される感覚世界」の意味するところがよくわかりませんでした。「各々の社会がもつものをどこでつなぐのか」とおっしゃっていましたが、どういう意味ですか？（文Ⅱ・1年）

朝鮮通信使と日本人が同じ唐詩の世界に参入して意見交換していたという事実を知って、国を超える大きな世界があることを実感しました。東アジア世界が広がってはいるけれども、その世界の中にも各々の個別性があって成り立っていることが面白いと思いました。（文Ⅲ・1年）

日本においては漢詩のかわりに和歌が類似の役割を果たしていたのだろうか。（理Ⅱ・1年）

# 近代化の礎

## ～明末清初における東アジア諸民族の西欧科学受容について～

渡辺　純成

第 6 回：2006 年 11 月 20 日（月）

### 講義内容

***東アジアにおける西欧科学技術受容の二つのピーク***

東アジアでの西欧科学技術受容は二つのピークが指摘できる。一つは明末清初期、もう一つは洋務運動期である。明末清初に作成された漢文科学書は、日本では数学・天文学関係が 18 世紀前半から本格的に流入し始め、蘭学を刺激するきっかけとなった（医学にはほとんど影響が見られない）。朝鮮でも、燕行使の往来を通じて 18 世紀に流入し、実学の勃興を刺激した。洋務運動で作成された科学書・語学書も幕末・明治初期の日本で利用されている。しかしこれらは一方的な影響関係ではない。明治期の日本で作成された科学書が清末の中国で利用されていたことは、よく知られている。このように、東アジアにおける科学技術史は、各国ごとに閉じていたものではなかった。学説史を追えば必然的に国境を越えるのである。例えば和算は、宋元時代の中国数学と朝鮮経由で接続し、明末の実用数学と東シナ海経由で接続するが、明治以降の日本の数学とは事実上断絶していた。また、言語の壁を乗り越えるコストを軽減するために、リンガ・フランカとしての中国語文言文（もしくはその訓読）が利用された。これは学術を体系的に翻訳し移入するコストが大きかったためである。この点は東アジア・内陸ユーラシアでの仏教経典の翻訳のあり方と比較されたい。

***明末清初の状況***

明末清初に見られた西欧科学受容は、現在にもその痕跡を残している点で重要である。「平行線」「直角三角形」などのテクニカルタームはこの頃に出来た。天文学・数学・軍事技術・測量技術、また限定的ではあるが医学などがこのとき流入している。乾隆帝のホロスコープには天の周りは 360 度であると書いてあり、占星術の世界にまで西洋天文学が入っていたことが知られる。清前期の康熙帝の時代には、それまでの西欧諸語から中国語文言文へという使用言語のあり方に加え、西欧諸語から満洲語文語を経由して中国語文言文へという回路が見られるようになった。清朝では満洲語が第一公用語であり、経書や性理学の解説書が満洲語に翻訳され、政府によって公刊された。

***満洲語の数学書***

満洲語で書かれた数学書は康熙年間のものである。イエズス会宣教師も康熙帝も、漢文より満文で読み書きするほうが楽だったようである。満文『幾何原本』や満文『算法原本』は最終的に漢文に訳されて、有名な数学書『数理精蘊』の一部分となるが、数学書としての質を見ると満文のもののほうが高く、漢文のほうは例えば乗法の可換性に関して無自覚であったり、証明を省いたりするなど、質が落ちている。一般に満洲語の書物は漢文から訳されたと考えられがちであるが、清代の研究には満洲語の書物を見ることが必要であることを再認識させられる。康熙帝が満洲語の書物を出したのは満洲人を教育しようとしたからだと考えられるが、満洲人のなかからは顕著な数学の業績は出なかった。ただし、旗人のなかからは優秀な数学者を輩出し、また測量などにも活かされるなど、康熙帝の仕事は少なからぬ影響を与えたと思われる。

なお『算法原本』の序文には、格物致知のはじまりは数を明白にすることにありと述べている。イエズス会士は現地の習慣を尊重して布教を行ったことから、このように中国に妥協したかたちで数学を伝えたものと見られる。

***満洲語の医学書***

満洲語の医学書も数はあまり多くない。西洋医学の翻訳書としては『格体全録』『西洋薬書』などがある。『格体全録』はヨーロッパの解剖学書からの図版が多く用いられており、中国の絵の描き方と全く異なる絵が入れられている。この本は日本で有名な『解体新書』に比べても質が高い。『解体新書』が語学力の限界で訳せていない箇所が多く、本文のみ辛うじて翻訳を行ったのに対して、『格体全録』では動物実験の手順までが詳細に書かれてある。もしこれが漢文に翻訳されていれば、東アジアの医学史は変わっていたはずだが、康熙帝の手元にあったまま翻訳されなかった。これは当時の典礼問題や解剖学に対する中国人の拒否反応によるものと推察される。また『格体全録』はヨーロッパの書物を忠実に訳したものというわけでもなく、例えば内臓を叙述する順番が異なって、『黄帝内経』の配列

に合わせている。ここには康熙帝による容喙があったらしい。

数学・天文学と医学が以上のように異なった動きを示したのも、漢訳の有無に負うところが大きいようである。

## 質疑応答

Q：日本の書物もヨーロッパ語を漢訳していたが、なぜ杉田玄白たちは日本文で訳さなかったのか。
A：学術を記述する言葉として漢文が定着していたことがひとつと、また当時は言語ナショナリズムがそれほど強くなかったことがあげられる。

Q：漢文で書かれることで格が高くなったということか。和語やハングルで訳さなかったことに面白さが見出せる。
A：満洲語のものは内陸ユーラシアにひろがりやすい性質があり、『格体全録』などはモンゴル語に訳されている。どの言語にすると流通しやすいかはそれぞれあると思う。

（文責：池田）

## 講義アンケートから

清朝において西洋の自然科学が満洲語訳されて受容されたということがおもしろく思いました。医学などは満洲語には訳されたが、漢文訳はされなかったというところに清朝の支配階級と漢人との隔たりの大きさを感じました。さらにそのことによって西洋医学が漢文を通して日本に伝わらなかったということも、日本と清朝支配階級とが疎遠だったことを表しているような気がします。（文Ⅰ・1年）

満洲語に注目するのは意外でしたが、清朝は満洲から中国全土に拡大したのでよく考えたら当然ですね。今まで「日本と中国」として考えてしまいがちでしたが、中国内における多様性に気付かされました。（文Ⅱ・1年）

翻訳事業に傾倒して亡んだ吐蕃などの国についての言及が興味深かった。数学書を訳す際に言語によって論理的分かり易さが違うのは言語自体の性質なのか、それとも訳者の熱意の違いなのか気になった。（文Ⅱ・1年）

西洋の人にとって、漢文より満洲語の方が学び易い、というのも気になる。SVO の置き方は漢文の方がラテン語系に似ているのでは、とも思うのですが。（文Ⅲ・1年）

満洲語の、文法は日本語、文体は源氏物語的というのは面白かった。解体新書の半世紀も前に、解体新書よりも味のある、詳しいものが発行されていたことにおどろいた。それが漢文に訳されていたら、東アジアの医療は大きく変わったと思う。（文Ⅱ・1年）

満洲族は牧畜生活に慣れていたために、格体全録においてはすい臓や腺などのところの翻訳はうまくいっているが、日本では牧畜生活に不慣れなため、解体新書においては、同じところの翻訳に手間どった、というように、日本だけでは東アジア全体を語れないということが興味深かった。また、（解剖書目次の）並べ方や書き方にも、ヨーロッパと東アジアの違いが表れて、面白い。（理Ⅰ・1年）

『格体全録』の図が西洋的であることや、注釈まで訳してあることが面白かった。また数学書の漢文訳で微妙に質が落ちているのと同じように、『解体新書』も少し精度が落ちているのかな、と思った。翻訳には限界があったのだろうけど、それでも少しずつ受容していく姿勢が日本文化（日本の近代科学？）の発展に貢献したんだろうな、と思った。（文Ⅲ・1年）

# 宋代明州と日本平泉の友好往来

林　士民

第7回：2006年11月27日（月）

## 講義内容

中国寧波市文物考古研究所の林氏を招き、明州（寧波）と平泉の文物交流の痕跡について、ご専門である陶磁器をはじめ、様々な出土品や記録、建築物の画像を用いて紹介していただいた。その後、寧波大学外語学院の楊建華氏により、同大学の現況を報告していただいた。

***寧波－平泉と「海のシルクロード」***

寧波は七千年の河姆渡遺跡を有する歴史的な文化都市である。また東漢～北宋まで有名な越窯青磁を焼いていた上林湖、東漢の都江堰荷に匹敵する美しさを誇る唐代建築の它山堰水利工程、最澄大師が法を求めた開元寺、有名な建築著書『宋営造法式』より90年も早く建てられた保国寺、日本曹洞宗の祖庭である天童寺、日本の重源が建築を学んだ阿育王寺や、明代の蔵書楼天一閣などでも有名である。

唐代、明州（現在の寧波）は広州、揚州とともに三大名港に数えられた。唐の海岸線の中央にあって南北洋へむかう航路の発着地であり、日本の遣唐使や商人の上陸港であり、大運河への入り口でもあった。国家は対外貿易権をコントロールするため市舶司を設立したが、北宋時代から元まで、寧波（明州、慶元）は一貫して中国の「三司」のひとつだった。特に南宋時代、明州港は宋朝の都である杭州に最も近い港として直轄統治を受けた。また、日本や高麗へ行く広東、福建の商船はすべて明州の市舶司で公式証書を取る必要があった。なお、20世紀の終わりに、寧波港の取扱量は上海に次ぐ中国第二位となった。現在、寧波市は「海上シルクロード」として、世界文化遺産を目指し申請している。

「海上シルクロード」は、明州港から出発し、東シナ海を渡り、日本の五島列島、難波を経て、中尊寺に代表される黄金文化が花開いた奥州平泉にまで達していた。平泉から出土した多くの文物は、12世紀初めにおける中国の港町との交流を裏付けている。

***交流の証***

①黄金：鎌倉時代、奥州で産出した黄金（砂金）は平泉から国内各地に運ばれ、主要貿易品目として明州（または慶元）港を通じ宋に運ばれた。加藤繁の研究によれば寶祐年間（1253～1258）、慶元府や商人が一年間に日本から輸入した黄金の総量は一万両で、南宋の年間黄金生産量より高かったという。また日本商船は大陸で砂金を銅銭に交換した。現在日本では大量の銅銭が出土し、その80%以上が北宋銭である。平泉だけでも「熙寧重宝」（1071年鋳造）など多様な宋銭が出土している。『東大寺文書』によると、畿内では売買地の価格を全て銅銭の額でつけていたらしく、12世紀半ばの日本では、貿易による宋銭の輸入と流通が始まっていた。

②陶磁器：平泉からは青白磁、青磁、白磁が出土し、それぞれに寧波との関わりが見える。まず青白磁の執壷、碗、合子については、明州の埠頭、市舶司、旧住居、城壁の土台からもよく発見されるもので、すべて南宋時期に江西景徳鎮で生産されたものと推定されている。宋～元代の景徳鎮産の合子、梅瓶破片が多いのは日本各地の出土状況とも同様である。次に平泉出土の青磁は、その色調と製造時期の記録に照らすと、北宋の皇祐以後（1050）～南宋紹興二十年前（1150）にかけての浙江龍泉系に属すことがわかっている。龍泉窯の陶器の土は細かく、焼く温度は福建同安窯より高く、同安窯より耐久性に優れているとされている。最後に、平泉出土の白磁は主に四耳壷、広口椀、執壷（水注）などである。図版の特徴説明に照らすと、河北の定窯の白磁製品ではなく、寧波の埠頭旧址、旧住居、永豊庫から出土した白磁製品とよく似ているため、それは南方で生産されたものと考えられる。

③仏教寺院：明州は仏教東伝の聖地でもあった。804年最澄大師が浙東の天台山で仏教の天台宗を学び、帰国後比叡山で天台宗を創立した。850年天台宗高僧慈覚大師円仁が平泉に弘台寿院を開山し、859年中尊寺と改名、1105年奥州豪族藤原清衡が「唐式」彫刻の建築を開始し、21年間かけて完成させた。また宋代の名僧栄西、道元や、東大寺再建に関わった重源、明代の策彦なども明州と密接な関係がある。

④その他、寧波市の江北区銭塘江以南類型の慈湖遺跡の中から出土した下駄や、平泉から出土した陶器の押印模様からも、古代以来、両地の間にすでに文化関係があったことが伺える。　以上のように様々な文物を通して、「海のシルクロード」の長い交流の歴史や、その範囲と内容をかいま見ることができる。ぜひ寧波を訪れて自分の目で見てほしいと思う。

***寧波大学の紹介***

楊建華氏からは、経済面を中心とした寧波市の現況と、寧波大学の沿革・教学事情についての説明が行われた。とくに、楊氏が専門とする日本語教育に関しては、日本関連企業の多い寧波という地域的条件とあいまって学生の日本語履修熱が高いことや、楊氏自身の日本語教育への取り組みなどが紹介され、まさにいま現在進行中の「寧波と日本のかかわり」が受講者に伝えられた。

（文責：小川）

## 講義アンケートから

林先生の講義ではスライドが多く、面白かった。平泉から輸出された砂金の量がすごく多かったことなどに驚いた。中尊寺金色堂だけは小学生の頃に見たことがあり、マルコ･ポーロが日本をジパングと呼んだこともわかるなぁと思っていたけれど、この砂金輸出量からもますます納得がいくな、と思った。楊先生の話も興味深かった。他の言語を学ぶためにカラオケ大会を開いたり、寸劇を行ったり、そのような意欲的な取り組みは見習わなければいけないな、と少し耳が痛かったです。（文Ⅲ・1年）

林先生の話では寧波と平泉の交流が具体的に聞けて興味深かった。またゲタさえも中国から影響を受けていることには驚いた。（文Ⅰ・1年）

陶器や建築様式といった美術方面の交流についてのお話が中心で、とても楽しく聞けました。私としては平泉という場所は日本海側よりも太平洋側に近く、寧波から行くにはかなり面倒な場所ではないかと思っていましたが、発掘された品々からも、どれだけ交流が深かったかがわかり、驚きました。平泉を「海上シルクロードの終点」と表現されていたのもとても新鮮に感じました。日本史の教科書を読むだけではまずこんな発想は生まれてこないと思います。（文Ⅲ・1年）

寧波はなぜ、日本の中でも比較的遠い平泉との交流がさかんであったのだろうか。平泉といえば12世紀の奥州藤原氏の支配のもと繁栄したというイメージがあるが、奥州藤原氏滅亡後はどうなったのだろうか。あと、細かいことかもしれないが、中尊寺は平安末期の浄土教の信仰のお寺というイメージが強かったが、もともとは天台宗の僧がつくった寺だということを初めて知った。（文Ⅰ・1年）

# 宋代明州の地方志における中日経済・文化交流の記録

方　祖猷

# 王陽明と中・日・韓三国の民族性

銭　明

第８回：2006 年 12 月 4 日（月）

## 講義内容

本講義では、寧波大学の方氏、浙江省社会科学院の銭氏により、地方志、陽明学という視点から、近世の日中文化交流について発表していただいた。

***『宝慶四明志』に見る日本との交流（方祖猷）***

寧波の地方志編纂は、『乾道四明図経』（1169）、『宝慶四明志』（1226－1227、以下『宝慶志』と略称）に始まる。特に後者は宋と日本の経済・文化交流の事跡を記載した貴重なものである。

①唯一の貿易港：『宋史』には、もともと山東経由であった高麗貿易が、遼の圧力を受けたため、熙寧 7 年（1074）に明州（現在の寧波）経由へ改定されたことが記されている。『宝慶志』によれば、明州は、日本や高麗と貿易をする唯一の港であるという。高麗だけでなく日本にとっても唯一の貿易港であったという『宝慶志』の記載は、正史である『宋史』を補足している。また明州に置かれた市舶務が規定する関税についても、『宝慶志』に収録された胡榘が朝廷に宛てた『札子』では、条例で定めた船舶税や廉価買取などを経て、全徴税率が 5 分の 2 に達する状況への批判と改善策が提示されている。その他、日本からもたらされた上質の木材や銅器といった貿易品目も記されている。

②仏教交流：『宝慶志』には、仏教の日中交流に関して３つの記載がある。まず、同巻十一「開元寺」には、唐代に日本の僧侶・恵諤（慧諤）が五台山から観音像を運ぶ際、難航のため浙江の普陀山にそれを残した逸話がある。この観音像が「不肯去観音」と呼ばれ、明州の開元寺に安置されるまでの経緯が『普陀山志』や『昌国州知志』にも記されている。

次は、五代の頃、呉越王が日本と高麗へ使者を遣わし、天台宗の典籍を求めた逸話である。唐の武宗による仏教弾圧政策により、浙東を拠点とする天台宗の経論はほとんど焼き尽くされたため、その後三代に渡り仏教を信奉してきた呉越王は、徳韶や義寂ら高僧の助言を受け、海外に経典を求めた。『乾道四明図経』には、高僧に延寿なる人物がいたことや、『宝慶志』には、子麟禅師派遣後、日本・高麗を経て高麗王の僧侶派遣を得、寺院建立が成った経過といった貴重な記載もある。最後に、『宝慶志』には日本の栄西禅師が大木を天童寺に運び、壮麗な伽藍の建立に一役買った逸話もある。このように寧波の地方志を通じて、日中経済・文化交流の詳細をうかがうことができる。

***陽明学と中･日・韓の文化形成（銭明）***

陽明学の始祖・王陽明は浙江省余姚の人で、明代の大思想家である。彼の思想は中国の近世社会に影響を及ぼしただけでなく、日本では中江藤樹らによる藤樹学派、朝鮮半島では鄭霞谷による江華学派といった陽明学を奉ずる学派を生み出し、また近代期における社会変革に対してもある程度の推進的作用をもたらした。東南アジアに陽明学が伝わらなかったことを考えると、陽明学は東アジア地域に（現在の中・日・韓・朝）固有の文化遺産だといえる。しかしその共有の中にも、明確な個性があることを、以下比較により見ていこう。

中・日・韓は儒教文化圏に属しているが、その強調点は異なる。仁・義・礼・智・信という価値理念を等しく重視するよう呼びかけた儒教だが、中国は「仁」を重視し、制度と連動して体系化された。韓国は李氏朝鮮期に異民族の侵入を受け、それに反発して「義」（「孝」という説もあるが原理は同じ）を重視し、「道義」精神を形成した。日本は「忠」を重視し、集団主義的態度が優越する社会を形成した。また近代化において、中国の儒教は普遍的な価値観に収斂しやすく、近代文明の受容を阻害した。一方、韓国の儒教は民族主義につながり、日本では儒教の実用主義的傾向が強かったために近代化に対して妨げにならなかった。

心学についても、同様の傾向がある。中国では陽明心学、韓国では霞谷心学、日本では石門心学が形成され、いずれも主体意識、人文観念、多元的価値観などの共通性を備えており、今後、東アジアの共有文化を考える上で示唆的である。一方、これらの陽明学が果たした作用は、三国それぞれの文化的個性を反映している。中国の陽明学は次第に社会化し一般民衆の教育や社会救済へと展開していった。日本の陽明学は儒学の教養から武士の思想的武器へと功利的に用いられ、明治維新を推進した。韓国では、当初から長い伝統の

ある朱子学に対する異端思想として厳しい批判にさらされる環境の中で、朱子学との調整に細心の注意を払いながら受容された。結果、日本では政治・思想面での指導原理として機能し、一方、韓国ではあくまで思想文化世界の周縁的地位にあって傍観者的位置にとどまることとなったのであり、それぞれの陽明学が果たした社会的役割には大きな相違があると言えよう。またこれは陽明学導入のルートが、日本は多彩な学派がいた浙江経由、韓国は異端を批判し正統性を強調する学派が多い中国北方経由であったことと関係があるかもしれない。

（文責：小川）

## 講義アンケートから

天台宗の文書が消失した際に、日本や高麗に文書を求めて行った話が非常に興味深かった。文化的にそれら２国よりも優れているという自覚があったであろう中国の人々は、経典が海外に渡って「劣化」している恐れを抱かなかったのだろうか。（文Ⅲ・２年）

私は中国語選択なので、今回、中国語で講義を聞く機会が持てて嬉しい。方祖猷先生の観音様による夢のお告げについての話と、銭明先生の日本・中国・韓国三国の陽明学受容のされ方の違いについての話は興味深かった。仏教でもそうだが、地域を越えて同一の教義が浸透しているものの方が少ないのだろうと感じた。（文Ⅱ・１年）

陽明学が東南アジアに影響を及ぼさなかったという点が興味深い。海で隔たっている日本より、陸続きのベトナムとかの方が影響を受けそうな感じがする。（文Ⅱ・１年）

方祖猷先生の講義では明州港が日本・高麗・中国の唯一の窓口港であった、ということが印象的です。誰がどのくらい税をとっているのか、のところで不思議に思ったのが、雑事の貨物に十九分の一税をかけたということです。これほど半端だと端数がでてしまう気がするのですが…。一般の客商は十五分の一とキリがいいことを考えるとますます不思議です。（文Ⅲ・１年）

中国人が日本の文化と聞いて連想するのは日本の現代文化だと知り、驚きました。外国の人にとって日本の文化といえば室町時代あたりから形成されてきた古い伝統的な文化だと思っていたからです。銭明先生は江戸時代の文化が一番成熟した文化で、それがあまり知られていないのは残念だとおっしゃっていましたがその通りだと思います。（文Ⅲ・１年）

中国の側から見た日本と中国の交流について聞けて興味深かった。歴史的な面だけでなく、現代における文化交流の話も面白かった。（理Ⅰ・１年）

同じ陽明学という素材が三国の歴史的・文化的・地理的差異によって、それぞれ大きなちがいを生みだしてきたという事実は面白い。儒学は東アジアの共通文化であると言われ、それゆえ安易に「アジアは一つ」というスローガンに動員されてしまいがちであるが、陽明学一つをとってもそれぞれ微妙な差異と共通点が見出される。これからの東アジア国際関係は、このことを念頭に置かなくては一歩も進まないだろう。あと、栄西が海を渡って巨木を運んできたそのやり方が気になる。船のうしろにプカプカ浮かべてきたのだろうか、それとも船腹にくくり付けてきたのだろうか。（文Ⅲ・１年）

# 列島・半島・大陸の船

安達　裕之

第9回：2006年12月11日（月）

## 講義内容

### *造船史研究の手掛かり*

木造船の世界では地域が違えば、船が違うといっても過言ではない。船の歴史を知るには、発掘船、絵画資料、記録、船の模型などを手掛かりとするが、なかでも船の具体的な姿の分かる資料が不可欠である。こうした資料はどの地域でも残っているわけではなく、大陸と半島の船の歴史は列島ほどには分からないのが実情である。

### *列島の南の船*

日本の船の歴史は、縄文時代の丸木船に始まる。丸木船は積載量が限られ、耐候性に欠けるが、黒曜石の海を越えた分布状況は丸木船にそれなりの航海能力があったことを物語っている。丸木船は堅牢で長期間の使用にたえるため、森林資源の豊富な日本では最近まで使われ続けた。

水稲技術と金属器が大陸から伝えられ、大陸と交渉を持つ弥生時代に大型船が出現した。以後、列島の南（瀬戸内海・太平洋）と北（日本海）は異なる大型船を発達させることになる。こうした南北の海で船が異なる現象はヨーロッパでもみられる

古代・中世の列島の南で大型船の船材として好まれたのは楠である。今日までに大阪・愛知で二材以上の刳船部材を前後に継いだいわゆる複材刳船が5艘出土しているが、うち4艘の船材は楠であった。低いところで枝分かれする楠には幅は広いが長い材のとれない欠点がある。前後継ぎの技術は楠の欠点を補う技術といってよく、中国で隋代の複材刳船が出土しているので、金属器の使用による工作技術の向上した弥生時代にこの技術が中国から伝来したと考えられている。

複材刳船は船首ー胴ー船尾の三材構成が普通であるが、河川では二瓦と呼ばれる船首ー胴ー胴ー船尾の四材構成の長大な船も使われた。瓦とは、半円筒状の胴の刳船部材が屋根瓦を思わせるところから生じた称である。

中世の海船としては、三材の刳船部材を継いだ船底部に数枚の棚板をつけたいわゆる準構造船が用いられた。『北野天神縁起』など中世の絵巻には準構造船が数多く登場する。14世紀までの海船は大きくとも当時の量制で300石積（載貨重量30トン）級であったが、15世紀になると幕府による遣明船の派遣に刺激されて、当時の量制で1000石積（載貨重量150トン）を超える大型船が出現する。しかし、こうした大型船もいまだに準構造船であり、永享4年（1432）派遣の遣明船をモデルにしたと推定される『神功皇后縁起』の軍船の船尾には刳船部材が描かれている。中世には楠の大材の入手はむつかしくなく、たとえ2000石積もある大型船でも楠の刳船部材を継いだ船底部で十分に間に合ったはずで、棚板を寝かせて幅を広げることにより船の大型化に対応したに違いない。刳船部材を継いだ船底部を板材で置き換えた棚板造りの船は遅くも16世紀に出現し、特殊な刳船部材を不要にしたことで船材の選択範囲が広がり、造船が容易になったと考えられている。

### *列島の北の船*

列島の北では大型船の出土例はなく、また北の船は中世の絵巻に登場しない。しかし、楠は北の沿岸には生育しないので、北の海では南とは系譜を異にする造船技術が発達したことは容易に想像がつこう。近世前期の北の商船は、一木から刳り出したL字形に近い断面形状の面木（おもき）を船底材の両側に配し、順次、船側材を接合（はぎあ）わせ、舷側板を取り付ける面木造りであった。思うに、当初は杉・草槙・桧葉などの長大な材で造った丸木船に舷側板を取り付けた準構造船が用いられていたが、中世のある時期に船の大型化のため、一木を刳った船底部を左右に分けて面木とする技術が生み出されたのだろう。

面木造りの商船は18世紀前期に衰退する。近世初頭以来の空前の材木需要は森林資源を枯渇させ、帆柱と面木に深刻な打撃をあたえた。帆柱は一材の一本柱に代わって多数の材を集成して造る松明柱が考案されたが、船底の角に用いる面木は一木を刳ってこそ意味がある。大木の入手難が面木の価格を高騰させたため、面木のような特殊な部材を必要とせず、大木が不足しても接合わせの枚数をふやせばすむ棚板造りの船が面木造りの船に取って代わったのだろう。

### *半島の船*

半島で発達した船は、加龍（船梁）で結合された両舷の船側材が特徴である。13世紀の木浦達里島出土船は船側材ごとに加龍があるのに対し、11世紀の莞島助薬島出土船はそうではなく、後者は前者に至る前段階の

船と考えられている。半島の小船としては、三材の刳船部材を左右に継いだ面木造りを思わせる船が使われていた。慶州の雁鴨池から発掘された統一新羅時代（657～882）の小船がそうであるし、元禄9年（1696）に蝦夷地に漂着した朝鮮船も同じである。

***大陸の船***

大陸で発達した船の特徴は、隔壁を入れた船体である。これまで出土した船のうち航洋ジャンクとして注目すべきは宋代の泉州船と元代の新安船であるが、いずれも上部がなく、復元がむつかしい。ジャンクを描いた中世の絵巻をみると、13 世紀の『華厳縁起』の宋船は一層甲板であるのに対し、『蒙古襲来絵詞』の元船は二層甲板である。朱印船も江戸時代に日本に来航した中国船の多くもやはり二層甲板船であった。しかし、イギリスのウースターが揚子江の河口から上流までの船を調査した20 世紀前期にはすでに二層甲板船は姿を消しており、明治に入って造られた琉球の進貢船の模型がその唯一の例である。新安船は二層甲板船の可能性がある。

（文責：池田）

## 講義アンケートから

今までは運ばれる物について学んでいたが、運ぶものそのものについて学ぶのが新鮮だった。（理Ⅰ・1年）

当時の重要な先進技術であった大型船建造の情報がろくに残っていないというのは不思議な気がする。特に、あれだけ先進的な船を完成させていた中国にもろくな史料が残っておらず、日本の絵巻物の不正確な画像くらいしか手がかりになるものがないとは、正直言って驚いた。（文Ⅲ・1年）

安達先生が非常に楽しそうにお話されたのが印象的でした。ただ、「華厳縁起」など私にとって未知の事柄が既知の事のように話されたので、難しかったです。また、列島・半島・大陸の船がどのように影響し合っていたのか、などをもっと知りたかったです。（文Ⅰ・1年）

廃船の部材が橋に転用されている絵がすごく面白かったです。船の作り方に何種類ものやり方があって、それぞれよく考えられているなあと思ってとてもびっくりしました。始めは「乗っている人＝こぎ手のみ」だったのが、水手＋乗客＋荷物というように載積量が増えていき、船がただの移動手段から、流通、外交などに深く関わりのある存在となっていったのだなと実感しました。（文Ⅰ・1年）

途中でまわってきた船絵馬が色鮮やかできれいだった。（文Ⅱ・1年）

原始的な丸木舟にも長持ちという長所があり江戸時代まで使われていた、という話は意外だった。男鹿半島に近年まで残っていた丸木舟には NHK「小さな旅」で感じるような望郷の念を感じた。二層甲板の大規模な中国船、また今回は出てこなかったが帆のない黒船を見たときの日本人の驚きは相当なものだったのだろう。（文Ⅲ・1年）

# 日本におけるジャンクの導入

安達　裕之

第10回：2006年12月18日（月）

## 講義内容

日本と中国の船は船体構造も艤装も異なるが、日本に中国の造船技術が導入されたことが過去に四度ある。最初が遣唐使船用、二度目が朱印船用、三度目が鎖国下の商船用、四度目が明治30年代の国内海運の商船における中国式の伸子帆の大流行である。

### *遣唐使船*

8世紀まで遣唐使船は、九州から朝鮮半島の西岸を北上し、黄海を横切って山東半島に渡った。この北路なら途中での飲料水や食料の補給も可能なうえ、避難場所に事欠かないため、日本海の穏やかな春夏なら大型の準構造船で事たりたと考えられている。

8世紀以降、半島を統一した新羅との関係が悪化すると、遣唐使船は東シナ海を横断する南路をとり、しばしば遭難した。季節風の知識がなかったからである。南路をとる遣唐使船用に大陸系の技術が導入されたことは、承和5年（838）の第15次遣唐使に加わった円仁の記録からわかる。大陸系の技術といえば、白雉元年（650）に第2次遣唐使用に安芸国で百済船が造られたが、実態は不明である。8世紀中期以降、安芸国における遣唐使船の建造は6回を数え、ここに大陸系の造船技術を身につけた集団がいたことは確実である。安芸国での造船について、記録は何の船とも述べていないが、百済船の建造から一世紀を隔てるだけに、新たに中国から技術を導入したと考えられている。寛平6年（894）の菅原道真の建議により遣唐使の廃止が決まると、大陸系の技術は、舵や櫓を除けば、日本の在来形船に何ら影響を及ぼすことなく跡絶えた。

今日、遣唐使を乗せ、東シナ海の荒波を蹴立てて走る勇壮な遣唐使船の絵や復元模型を見かけることがあるが、唐代のジャンクの絵も復元するにたる資料も伝存しないため、後代の『聖徳太子絵伝』法隆寺絵殿本や『華厳宗祖師絵伝』『吉備大臣入唐絵詞』などに描かれたジャンクを手掛かりにしている。

日本の中世の絵画には数多くのジャンクが登場する。もっとも、上記の作品のような秀逸な絵はまれで、今日から見れば、ほとんどが具体性に欠ける怪しげな記号の域をでない船がほとんどといってよい。なぜそれが一目でジャンクとわかるかといえば、油石灰を塗った白い船体に網代帆を張る船はジャンクの外にはないからである。日本の在来形船は白木の船体に筵帆を揚げていた。絵師はジャンク以外に外国船の粉本を持たず、色と帆で簡単に識別がつくところから、網代帆を張った白い船に中国船のみならず日本の遣隋使船・遣唐使船や百済船・新羅船・高麗船の役を割り振った。明らかに絵師の世界では網代帆の白い船は狭義であれ広義であれ唐船という約束事が成り立っていたに違いない。一方、網代帆の白い船が登場するのは祖師高僧伝絵や寺社縁起絵といった説話画だから、中世の絵解きを通して唐船は網代帆の白い船という観念が広まったことは容易に想像がつこう。

### *朱印船*

朱印船とは幕府から異国渡海朱印状を交付されて東南アジアに渡航した貿易船をいい、慶長9年（1604）から寛永12年（1635）までに356艘を数える。記録に残る限り、朱印船に用いられたのは「朱印前」あるいは「日本前」と呼ばれたジャンクで、中国や暹羅（シャム）などで購入されたほか、国内でも造られた。

残念ながら朱印船の具体的な姿を伝える絵はきわめて少なく、しかも鎖国を目前にひかえた寛永11年（1634）に集中している。長崎の清水寺に奉納された末次船の絵馬、同時期の絵馬を写したと思われる荒木船の絵、京都の清水寺に奉納された末吉船の絵馬などがそれで、寛永期の朱印船が帆装のほかに舵や船尾廻りに西欧のガレオン船の技術を採り入れたジャンクであったことがわかる。こうした折衷形式のジャンクとしては他に暹羅船がある。暹羅船の名が示すように折衷船が生まれたのは東南アジアと考えられるが、中国船や西欧船に類例のない矢倉形式の船首楼は朱印船に限られる。

### *鎖国下のジャンク*

寛永12年（1635）、幕府は日本人の海外渡航を禁じるが、同年の熊本藩と延宝3年（1675）の仙台藩のように、ジャンクの建造を上申する大名には許可をあたえたほか、自らも寛文9年（1669）にジャンクを造った。この船は延宝3年に小笠原諸島を探検するなどジャンクならではの高性能を発揮したにもかかわらず、同9年に長崎で腐朽を理由に解体された。

天明7年（1787）幕府は、松前ー長崎航路に和洋中三ヶ国の技術を折衷した俵物廻船三国丸を就航させた。俵物とは干鮑・鱶鰭・煎海鼠を俵に詰めて輸送したこ

とに由来する称で、銅代替輸出品として対中国貿易で重要な位置を占めていた。天明 4 年に幕府の命を受けて長崎奉行が異国船の取調べを進めていたところ、遠見番原才右衛門が、西欧船・中国船・日本船ともに長所もあれば欠点もあるので、異国船をそのまま造るよりも三者の長所を折衷した船を造るにしくはないと建言した結果、天明 6 年に三国丸が大坂で造られた。原案では、唐船造りの船体に和式の総矢倉を設け、帆装は西欧船にならって主檣に横帆を二段に張り、船首尾に補助帆を揚げることになっていたが、建造中に二段帆は一枚帆に改められた。処女航海からの帰途、三国丸は日本海を北上中のフランスのラ・ペルーズ艦隊と隠岐の北東海上で遭遇し、乗組員が三国丸の姿を二枚の絵にとどめている。天明 8 年 10 月、三国丸は出羽国赤石浜で破船した。

寛政 11 年（1799）に東蝦夷地を直轄した幕府は朱塗りの御用船いわゆる赤船を就航させるが、赤船は三国丸を下敷きにしていた。

（文責：池田）

## 講義アンケートから

三国丸の和中洋折衷の考えが面白かった。元々構造が違うもの同士の一部を組み合わせることで長所が発揮できるものなのかは疑問だが、挑戦としては面白い。（文Ⅲ・2 年）

朱印船の図が絵馬として残っているというのもおもしろいと思った。鎖国をしてからも、中国との貿易のために外来船の技術を取り入れた船の開発をしていたのは、意外だった。（文Ⅰ・1 年）

田沼時代に銅での決済が行われていたことは知っていたが、その輸送の安全性の確保のために、船を新たに造ってしまうのがすごいと思った。（文Ⅱ・1 年）

帆の種類によって利用できる風に違いがあると初めて知った。中国の船が白いのは船体に油石灰を塗っているからだということも初めて知った。（文Ⅱ・1 年）

「朱印船についての技術的な仕様は絵しか残されていないのでよくわからない」とおっしゃっていたが、朱印船に限らず、船についての研究において絵がここまで大きなウェイトを占めているということは驚きだった。最後に触れられていた「船は必ずしも実用一辺倒ではない」という話もおもしろかった。（文Ⅲ・1 年）

船を外国から買っていた大名がいたことに驚きました。船はそれぞれ自分たちの国で造ったものを使っていたのだと思っていました。また鎖国後、朱印船として使われていた舟を壊さなかったというのは意外です。船があれば、禁止していたとしても行こうと思えば行けるはずです。それほど幕府の権力は強大だったのでしょうか。あるいは鎖国政策はそれほど大名らを束縛できるものではなかったのでしょうか。（文Ⅲ・1 年）

遣唐使船と日本国内で使われていた船に相当の違いがあり、構造的な面では基本的に中国船のレベルが高く、日本が中国の後をおっていたことを再認識させられた。造船技術は徐々に構造的に進化してきたのに、結局、現在の船にこれらの技術が生かされていないのは残念に思った。（文Ⅱ・1 年）

今までなんとなく、西洋船＞ジャンク＞和船という風な具合で優れていると思っていた常識が打ち破られた思いだ。技術の優劣というのは単純なものではなく、文化的コンテキストや様々なインフラの整備具合によって複合的に決定されるのだろう。黒田日出男氏の論文に、“黒船”のシンボリズムを論じたものがあるが、“黒”の持つ境界的で特殊なイメージが西洋船に投影され、それが後の西洋技術摂取にどう影響を与えていったのか……なども考えてみると面白い気がする。（文Ⅲ・1 年）

# 雪舟・若冲と東アジア

板倉　聖哲

第 11 回：2007 年 1 月 15 日（月）

## 講義内容

去年開催された日本古美術の展覧会で伊藤若冲と雪舟等楊は大きな話題となり、稀に見る盛況であった。しかしその報道では、彼等を「日本を代表する」画家としてのみとらえ、作品の「日本的」な美ばかりが強調された感がある。本講義では、同時代の東アジア美術に視野を広げ、多くの絵画資料との比較を通じて、若冲や雪舟の作品の背景を詳細に検討し、その制作過程や絵画に込めた創意工夫に迫った。

### *若冲の「中国絵画」研究*

若冲（1716－1800）は京都に生まれ、相国寺の大典顕常（1719－1801）らとの交遊の中で、数々の絵画作品を生み出した。それらの作品は、彼自身が語る通り、狩野派、宋元画を学び、現実の写生をした成果であり、代表作の「動植綵絵」（三の丸尚蔵館）にも彼が中国絵画を細部まで分析的に観察したことが容易に見て取れる。「白鶴図」（個人）の構図が、中国の文正の「鳴鶴図」（相国寺）と一致していたり、「老松鸚鵡図」（「動植綵絵」の内）の目の部分に、北宋・徽宗の「桃鳩図」（個人）にも見られるような漆を塗る手法を取り入れていたりする。さらに「猛虎図」（米国・心遠館コレクション）において、若冲は南宋の毛益に倣うと明言している。その原画は、北宋李公麟作とされる「猛虎図」（京都・正伝寺）で、虎の毛並みの描き方など細部まで丁寧に再現され、しかも若干デザイン化させることで独自の味わいを出している。

近年、この「猛虎図」は、実は朝鮮中期の絵画であることが判明した。同様に、著名な「百犬図」（個人）も朝鮮の画家、李厳の作品を模倣していたり、「葡萄図」の幹の描き方に朝鮮絵画の特徴である点描の手法が見られたりする。にもかかわらず若冲がしばしば「中国絵画」の模写を明言したのは、若冲のみならず当時の日本画壇がそれらを中国絵画として理解したこと、その背景には南宋絵画が日本にとって「古典」であったことが前提となっており、又、画に直接対峙することで良質なエッセンスを見抜いて自らの絵に吸収する若冲にとって、知識としての模写のルーツ（国籍や時代や作者）はそれほど重要ではなかったからだとも思われる。

### *雪舟と東アジアの同時代性*

雪舟（1420－1506）は日本絵画史上の重要な画家としては珍しく自ら中国へ赴き、画壇で活躍した人物といえる。雪舟の足跡は北京・大興隆寺の魯庵の詩序や、寧波の文人・徐璉希賢の送別詩序などに見え、彼の中国滞在中の作品の一部は現地で所有されていた。雪舟自身、「四明天童第一座」（天童景徳寺の禅班第一座）の署名を随所に用いたり、中国で「流行している」李在や長有声の画風を摂取したと記したり、渡航経験をアピールしている。

雪舟の渡明時の山水画は壮大な構成が採られ、小さなものへの視線を重視した同時代の日本画壇とは異なり、むしろ中国現地の濃度に合わせている。「四季山水図」（東京国立博物館）は、丁玉川「山水図」（個人）のような同時期の明代絵画の流行スタイルに拠っている。又、日本の風景を対象にした傑作とされる「天橋立図」（京都国立博物館）は、「西湖図」の視覚形式に倣っており、名所の家屋を大小均一化して詳細に描き込む手法も中国の実景描写の手法に拠る。花鳥画でも「四季花鳥図屏風」（京都国立博物館）の構図は、同時代に活躍した呂紀・殷宏らに先例が見える。「梅花寿老図」（東京国立博物館）の寿老も、同一ポーズが元・明時代の同一主題のものに見出すことができる。但し、雪舟作品の日本画壇における特異性は、彼が所有する東アジアの過去から当時に至るまでの知識が、日本で一般には浸透していなかったということである。

雪舟は型や流行を取り入れる一方、逸脱も試みた。国宝「慧可断臂図」（愛知・斉年寺）は、南宋・梁楷や戴進に構成の典拠を求めることができるが、達磨の白衣を強調する太線や達磨と慧可の配置に明らかな創意工夫がある。例えば、太線については、五代・貫休「羅漢図」から明まで継承された衣の描き方に類似している。つまり、雪舟は明代に至るまでの多様な画風を幅広く研究して取り入れ、結果として、作品に唐宋から明に至る中国絵画のダイナミズムを抽出し、自己主張を行ったのである。

このように見てくると、若冲や雪舟は日本絵画のオリジナリティの体現者という国粋的意義よりは、東アジア美術界の同時代性に身を置きながら、テーマや技法の模倣と独自の創意工夫を織り交ぜたところに、その優秀さが窺えよう。

（文責：小川）

## 講義アンケートから

最近、メディアが盛んに「和」というものを取り上げて、日本人特有のものだということを強調している。しかし、物事はそう単純ではなく、隣国の文化と密接に結びついている。特に印象に残った話は、昔の画家が中国の絵画だと思って学んだものが実は朝鮮の絵画だったというものである。それほど国と国の差異は曖昧だったのかもしれない。（文Ⅱ・1年）

外来のものを編集し、独自のテイストを生み出してゆくというのは、有史以来この列島に展開してきた文化に通底するメソッドであるのだと思う。ただ、一度自らの内部に取り込んだもの（若冲・雪舟 etc.…）が、その外来物としての起源を失い、はじめから内発的に生まれてきたものの様に観念されるようになるというのは、一体どのようなわけなのだろうか。今回は芸術分野の話だったが、同じことは思想・技術・政治などの分野にも通じることではなかろうか。（文Ⅲ・1年）

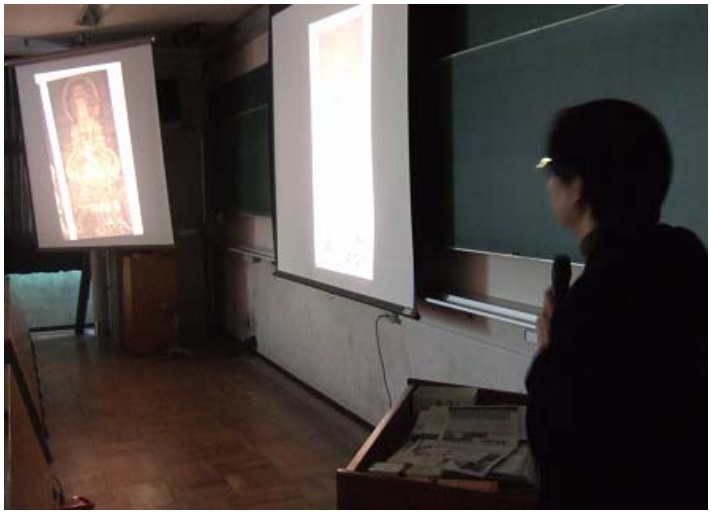
ゴッホが日本の浮世絵をまねた作品をかいていたことは知っていました。構図もまったく同じなのはどうなんだろう、と思っていましたが、今回の授業で、それよりももっとそのまま模写している絵があると知って驚きました。そのような模写は、自分の技術を磨くためにしたのでしょうか。授業を聞いていると“自分の作品”としているものもあったように思います。現在なら著作権の問題に関わるのではないかと思いました。（文Ⅲ・1年）

雪舟と若冲が日本的だと確かに思われている一方で、中国絵画の影響を圧倒的に受けている。また、質疑の際、修復・模写の話に関して、「オリジナリティ神話はここ百年のことで、今の現代美術はそれさえも相対化できる立場になっている。」とおっしゃられていて、目からウロコが落ちた。（文Ⅲ・1年）

過去の天才は最初から自分なりの画風をもっていたと考えてしまいがちですが、彼らもそれ以前の絵画を学び、宗教・風景のモードの中で絵を書いていたのですね。そして若冲と雪舟は、中国絵画というか中国・韓国・日本で共有されていたモードを使っていたと。（文Ⅲ・1年）

雪舟については、一番衝撃的だったのが天橋立図だ。中国の図をヒントにして周りを描いていることや家屋の描き方などが、異色なものだったことには驚いた。しかも、中央と周辺の描き方が違うことから長い年月をかけて描いたことがわかる、とか、色々なことが読み取れるんだなぁ、と思った。（文Ⅲ・1年）

今回はプロジェクターでたくさんの絵画を見ることができ、本当におもしろかったです。雪舟や若冲がどれだけ大陸の絵画の影響を受けていたのか、肌で理解できた気がします。それと同時に、絵画の見方のようなものも学べたと思います。私はいつも、ただ漫然と絵画を眺めるだけでしたが、板倉先生が本当に詳しく「見方」を解説してくださったので、次からはもう少し主体的に絵画を見てみたいと思いました。（文Ⅲ・1年）



# 菅原道真と東アジア

保立　道久

第12回：2007年1月22日（月）

## 講義内容

### *宇多天皇について*

日本史に関する一般のイメージには誤りが多く、我々が身につけている垢のような歴史常識をそぎ落としていく必要がある。その一つとして、菅原道真と宇多天皇の話をしたい。宇多天皇はかわった天皇であった。あまり知られていないことだが、陽成天皇が16歳のとき清涼殿で乳兄弟を殺すという事件が起こった。この事件の結果、皇統が光孝天皇に移り、その息子の宇多に皇位がまわってくることになった。光孝天皇は庶民的なイメージの天皇で、息子の宇多天皇の嫁が宇治郡司の孫娘であるというのも奈良時代と比べると驚くことである（その息子が醍醐天皇）。887年の宇多天皇の即位直後、藤原基経との間に勅書についての紛議が起こったことから（阿衡の紛議）、基経の娘を妻に迎えるが、よほど屈辱であったようで、日記からその思いが伺われる。このように宇多天皇は、清涼殿の殺傷事件と即位後の紛議を経験して帝位についた天皇であった。

### *寛平国政改革と菅原道真*

しかし阿衡事件の当事者である藤原基経・橘広相らが死去すると、王位も安定し、宇多天皇は寛平の国政改革を行う。これは平安時代に繰り返された代替り新制の原型で、菅原道真を抜擢して重要な諸改革を行っている。道真は橘広相の学問の師である菅原是善の子で、斉中・斉世王子の後見者にあたり、宇多が醍醐を太子に立てる相談にも与ったようである。893年に醍醐が立太子の礼をおこなうと、道真も春宮亮に補任された。そしてこの時期に天皇の代替り事業として遣唐使派遣が計画される。遣唐使は延暦・仁明と天皇の代替りを契機に派遣されており、安定した王位の継承を東アジアに宣言する意味があった。

### *新羅「海賊」の来襲と温州刺史朱褒の使者の来日*

これはほとんど意識されていないことであるが、同じ年、肥前国松浦郡に新羅の海賊が襲来し、白村江以来はじめての明瞭な戦争状態が起こった。翌894年春、再び新羅が対馬に来襲、2年連続朝鮮からの外寇をうけるという日本の史上はじめての大事件であった。また同じく893年、中国の温州刺史朱褒が商人王訥を使者として日本に派遣してきたことが史料上から伺われる。遣唐使派遣計画はどうやら商人が遣唐使派遣を仲介して商機を得ようとしたことに契機していたらしい。醍醐の立太子と重なる時期に起こったこれらの事件は、当時の東アジアにおける唐末の動乱を背景としていた。

### *代替り事業、遣唐使派遣計画の立案*

正確にいつ遣唐使派遣が立案されたかは不明であるが、894年7月の暫く前であったと推測される。道真が遣唐大使に任命されたのは祖父・伯父が遣唐使判官を勤めた前例を追ったもので、よく言われる政敵による陰謀というものではない。遣唐使派遣は宇多天皇自身の発意に基いており、東宮擁立の功労者である道真をその地位のままに遣唐使に任命し、その任務成功と帰国のなかで醍醐への代替り事業を展開しようとしたのである。また東アジア情勢についての確実な情報を入手する目的もあったものと推測される。

### *遣唐使派遣計画の中止*

しかし894年9月に朝鮮が対馬に侵攻してきたことが影響してか、遣唐使派遣は一時見送られることとなった。これは完全に中止ではなく、道真はその後も遣唐大使の肩書きを持っていた。平安時代は外国軍の到来によって始まったのである。東アジアの動乱はチンギス・ハンの時代まで続くが、このような情勢は、日本国家も肌で感じていたと思われる。遣唐使派遣見送りのもう一つの理由は、宇多天皇が譲位の構想をもったことであると考えられる。宇多は醍醐を自己の後見のもとに即位させるとともに、新たな姻戚関係を配置して宮廷政治を展開しようとしていた。宇多はこのプランの実施を早めようとし、遣唐使の派遣期間はこれを行えないため、遣唐使派遣を見送ったのである。遣唐使を派遣するも中断するも宇多の譲位プランに関係していたと言える。

### *醍醐の即位と道真配流*

醍醐天皇が即位すると、宇多が院政を行った。大納言藤原時平が醍醐を後見し、菅原道真が王弟斉世親王を後見する体制であり、その中で、時平―醍醐に対して、宇多・道真および後宮に力をもつ宇多の母班子という政治的に対立するグループが形成された。そして、900年に斉世親王と道真の娘の間に宇多の初孫の男子が誕生すると、皇位継承問題の発生とみてとった醍醐の側のイニシアティブにより、政変が起こり、道真は右大臣を罷免され大宰権帥に左遷された。それが王家内部の紛議を意味していたことは、斉世親王の出家によって明かである。

### *おわりに*

平安時代の王権の政治史は東アジアの国際関係のなかでとらえる必要がある。天皇制の展開は国内の政治史のみで語るべきではない。またなぜ基本的な歴史事

実がこれまで伝わってこなかったのか、それが伝わらないような日本の文化構造というものを考える必要があると思う。

## 質疑応答

Q : 遣唐使は代替り事業というが、なぜ天皇の代替りごとに派遣されなかったのか。
A : 天皇と皇太子がそろっている必要があり、文徳・清和・陽成の時期には条件がととのっていなかった。また「光」の文字が諡号につく天皇は皇統が代わったときで、代替りのセレモニーがなされることが多い。

Q : なぜ遣唐使がなくなったのか。遣宋使になってもよかったのではないか。
A : 遣唐使がなくなったのは唐がなくなったため。宋との間でも公的な関係を交わそうとしたことはあるし、また宋代は僧侶が多く留学したが、彼らは国家から派遣された公的な使者であったと見ることができる。

（文責：池田）

### 講義アンケートから

“遣唐使”というのは、今まで文化交流という面ばかり注目していたけど、王権に関する面からの注目がとても新鮮で新たな視点が開けました。代替わり事業としての遣唐使というのは初めて知りました。（文Ⅰ・1年）

菅原道真の助言が遣唐使廃止を決めた、という常識は間違いだというのは非常に興味深かった。しかし、その常識はどうして作られなければならなかったのか、疑問に思った。（文Ⅱ・1年）

最後に４つの「名分論」を批判しているが、この４つの論のもつ説得力についてもう少し知りたかった。③の「民族経済実力説」については、その後 500 年あまりも日中間の正式な貿易や国交はないままで問題なく済んだのだから、「日本では必要とする物質は十分に満足すべき状態にあった」という評価も根拠がないわけではないと思う。（文Ⅲ・1年）

平安時代は一般に平和な時期として考えられているけれど、実際は９世紀に日本は外国の軍勢の到来を初めて経験し、東アジアの激動の時代を肌で感じていた。やはり教科書の中の歴史は“覚える”対象としてあるのかと思ってしまいました。皇族、天皇、貴族の家系図を見ていつも思うのは、本当に狭い人間関係の中で複雑にからみ合っているということです。特殊で興味深いです。日本以外の国においても王族などについてはこのようなことが起こるのでしょうか。（文Ⅲ・1年）

菅原道真について、王家の内紛とどうからんでいたかという話を聞いたことがなかったので、興味深かった。ただ、もう少し東アジアとの交流に関わる話が聞きたかったと思う。（理Ⅱ・1年）

# 「海の東アジア」まとめ

小島　毅

第13回：2007年1月29日（月）

## 講義内容

最終回では、各回講義の内容をあらためてまとめなおしたうえで、東アジアの海域交流が日本にどのような影響を与えてきたのか、現在の研究状況をふまえて講義した。

***各講義の内容***

小島「儒教は日本に伝わったのか」では、儒教の根幹をなすのは「礼」であると定義し、（沖縄を除く）日本にはそれが浸透しなかったという特殊性を明らかにした。その原因は国粋的な意識にあるのではなく、遣明使には専門の儒教知識人（「儒者」）が同行しなかったという実情にあると考えられる。榎本「中世日本僧の海外渡航」では、894年遣唐使「廃止」以後も民間の船で僧侶が往来していたことを、日本製の偽造度牒を題材として確認した。そして、度牒偽造が個人ではなく仏教教団が組織的に関与していた可能性や、中国からの渡来僧がもたらした南宋式の寺院建築などから鎌倉文化が花開いたという指摘がなされた。齋藤「詩の伝播」では、東アジアの文人が共有する詩的感覚を検討し、江戸時代において三体詩から唐詩選へと詩の好みが変化したことや、朝鮮通信使と日本文人との漢詩の応酬など、二国間関係に止まらない東アジアの共通性の存在を描き出した。渡辺「近代化の礎」では、明末清初における東アジア諸民族の西欧科学受容について、満洲語文献とラテン語文献をとりあげ、宣教師の口述記録から、文章語である漢文に翻訳されるまでの過程を比較した。

11月末～12月初の講義では、中国・寧波からの招聘研究者4名により、陶器、地方志、陽明学を題材とし、日中交流史における寧波の重要性を、現在の寧波の状況と合わせて講演していただいた。安達「列島・半島・大陸の船」及び「日本におけるジャンクの導入」では、復元図面作成の困難さや考古学的発見、ジャンクの工学的利点が具体的に述べられた。板倉「雪舟・若冲と東アジア」では、絵画の実例を見ながら、近年「日本の独創性」として称えられる二人を、東アジアの視野でとらえ直した。まず若冲の作品は、中国の画の模倣とアレンジが根底にあり、また雪舟は「四明天童第一座」の署名を用い、中国渡航経験の威光を背負っていたなどの事実が紹介された。保立「菅原道真と東アジア」では、遣唐使「廃止」の真相に迫り、その背景にある皇室内部の宮廷闘争と道真の複雑な関係性を明らかにした。また、新羅からの侵入といった国際関係の危機的状況をふまえ、日本一国史観からの脱却の必要性を強調した。

***全体の共通点と寧波を焦点とする意味***

各講義は様々な視点や材料を用いているが、共通点も確認できる。それは日本を閉ざされた形で見ることへの反省である。つまり、近代における「日本の歴史」創出が指摘され、その恣意的な文脈に安易に乗らず、近代以前を当時の文脈から見ることの重要性が確認された。

そして「寧波」はまさしくその重要なキーワードとなる。なぜなら、我々は現在それを世界史ではなく日本史教科書に登場する外国都市として習い、また古来より「にんぽう」という現地読みが普及していたことを見れば、歴史的に日本人にとって親しみがあり続けた場所であるからだ。「寧波」は渡航日本人が見た最初の「異境」であり、「寧波船」といえば中国から来た船の総称であった。また道元が修行したのは寧波の天童寺であり、寧波の士大夫史氏一族の美術品がのちに足利家所蔵となり東山文化を支えるなど、そこを経由し重要な文化的影響が日本にもたらされたのである。現在、寧波の蔵書楼・天一閣で発見された北宋初期の「令」（律令の一部）が復刻され、日本の律令との比較が可能になった。今後ますます寧波を舞台とした東アジア研究が発展するだろう。

***海の視点***

最後に、先行研究として「にんぷろ」が意識しているフェルナン・ブローデル著『地中海』について言及したい。地中海と東シナ海の違いは、季節風、気象、波（東シナ海の荒波は交通環境を比較的厳しくした）などに見られる自然環境の相違に加え、人文環境や歴史経緯の違いも重要である。前者がローマの分裂後、複数国家の林立、複数文明の拮抗状況におかれたのに対し、後者は（近代以前）中華の存続により、中華文明の絶対的優位にあった。

まだ検討中ではあるが、それは仏教・儒教が「海の視点」を欠くことにつながるかもしれない。釈迦はインドの内陸部で活躍し、孔子は海を実見したことがなさそうだ。朱子は荒海で舟遊びをした経験があるが、山並みの原型を荒波と言うなど、イメージが乏しい。浜下武志によれば、18世紀琉球の儒学者金文和は、琉球を

説明する際、海に言及しないという。このように海を積極的に語る視点や表現をもっていない人文環境で、歴史的に海を利用して文明を共有していた事実を語りなおすため、東アジアの「海域」を復権することが必要であり、それは従来の西洋史や一国史に対し、グローバルな提起となるだろう。

（文責：小川）

## 講義アンケートから

寧波の重要性については、このテーマ講義を通じてある程度、理解したつもりでいたのですが、東山御物の出所や、道元等が修行していたのが“寧波”（あるいはその近辺）であったことは意外でした。（文Ⅱ・2年）

今日のまとめを聞いて、先生方は「アナール」学派的なことがしたいのかなと思った。ヨーロッパで50年くらい前に進められた研究をなぞるのではなく、その反省をいかして昇華させていって下さい。ブローデルを引き合いに出したにしては、視野が小さいのではないだろうか。（文Ⅲ・2年）

この講義で特に強く感じたのは、歴史には多様で多角的なものの見方が存在しているという、当り前ではあるが忘れられがちなことである。日本をより開かれた空間としてとらえるということを念頭において、これから歴史を自分で学んでいきたい。（文Ⅰ・1年）

東アジアという視点は中世日本の政治文化を語る上で不可欠であることがわかった。しかし逆に同時代の中国にとっては東アジアという枠組みが必要であるかは疑問である。中国にとっては日本・朝鮮は周辺国の１つであるという以上の意味はあったのか。中国にとってそれほど重要性を持っていなかったのなら、東アジア交流の意義を過度に強調する見方が、逆に「日本中心の歴史の見方」になっているということはないだろうか。（文Ⅱ・1年）

自分は世界史・日本史をともに学習したのですが、たしかに世界史にほとんど寧波がでてきませんでした。別の地域でもこれと同様の性格を持った海港都市があるのではないかと感じました（イギリスとフランスの１都市みたいな）。（文Ⅱ・1年）

第1回のガイダンスで講義予定を聞いた時各先生の様々な分野が並んでいて、それぞれに興味を引かれた半面、テーマ講義としてテーマは通じるのか？とかすかに思った記憶がある。海でつながる東アジアというテーマはよく分かったし開講の趣旨もはっきりしていたが、各講義がそれにそうのかどうかちょっと疑問だった。しかし回を重ね、そして今回のようにまとめてみると、一本の芯が改めて通って良かった。「日本―国史」「閉じられた日本」という一般的な認識（誤認識？）から「東アジア」という世界認識へと見方が広がって楽しかった。かつては日本と深く関わっていた寧波なのになぜ今は皆知らないのか今さらながらとても不思議に思う。寧波のように日本ゆかりの地なら、周さんも紹介していたように、観光としても悪くないだろうに・・・・・。日本が寧波を忘れていった過程やきっかけのようなものに興味をもった。（文Ⅲ・1年）

東シナ海の自然環境の厳しさは中国、他の東アジア諸国と日本の文化交流にどのような影響を与えたのでしょうか。（文Ⅲ・1年）

# 「海の東アジア」講義風景

第 4 回：榎本渉講師（最前列右）

第 6 回：渡辺純成講師

第 8 回：方祖猷講師（右）と林松涛通訳

第 8 回：銭明講師（右）

第 10 回：安達裕之講師（左）

第 11 回：板倉聖哲講師

第 12 回：保立道久講師

第 13 回：小島毅講師

# RA・TA のページ

○儒教思想史や平安朝政治史など比較的なじみのあるテーマから、満洲語の数学・医学文献それに造船史といったまったく未知の分野に至るまで、バラエティーに富んだ内容の講義を、スタッフという立場をうっかり忘れて毎回興味深く聴講しました。

それぞれの講義のおもしろさとは別の問題として、「テーマ講義としての統一性やいかに？」という点については、学生アンケートの中でもなかなかに手厳しい意見が寄せられました。ただ、多種多様な論題の中にも、「日本一国で完結した歴史像に対し、東アジアという枠組みから見えてくる歴史像をぶつけ、それによって既成の日本史・日本文化像を見直そう。」という一貫した視角があることは伝わったのではないでしょうか。

実際、アンケートの中には、モノの美しさ・精巧さに対する率直な感動を足がかりにしながら、さらに踏み込んで「近代より以前の歴史像を見直すということは、そうした歴史像が形づくられた近代からこんにちに至るまでの自己（日本）を見直すという作業を自ずと伴うものだ」という点まで汲み取ってくれている回答も見られました。当初の想定以上に、「海の東アジア」的視座を多くの学生に受け止めてもらえたとすれば、講義をお手伝いした者としてとてもうれしいです。そうした受講学生の中から、最新の研究成果を享受するだけではなく、東アジア地域の歴史・文学・美術などを自身が研究する立場へ一歩踏み出してくれる人が一人でも多く出てくれることを期待しています（願わくは文学部中国思想文化学専攻に向かって一歩！）。

最後になりましたが、講義のスムーズな運営にご尽力いただいた講師の先生方、EALAI スタッフ、それに TA のお二人にお礼もうしあげます。(RA・新田元規)

○毎回の授業アンケートで、学生の方々がいろいろな感想を書いているのを楽しく読ませていただいたが、さてこうして自分がここに感想を記すとなると、何について書いたものか迷う。恐らくそれは、たいした貢献をこの仕事にしてこなかったからだろう。私の撮影した写真はなぜかいつもぶれていたし、だいたいの仕事は RA の新田さんはじめ EALAI の方々にしていただいたので、あまり偉そうにこうであった、ああであったとは書けないのかもしれない。それにしても、長らくゼミ以外の授業にでていなかった身には毎週の講義が新鮮で、すこぶる楽しい仕事だった。東大の学生は一年生からこのような授業が受けられるのだから恵まれている。私のやったことと言えば短い講義ノートと輪郭のぼやけた写真をとるくらいだったが、それは幸せな仕事でもあったと思う。小島先生・齋藤先生や EALAI の方々はじめ、終始御牽引いただいた新田さんと小川さんに感謝したい。(TA・池田勇太)

○各分野の先生方が次々入れ替わるテーマ講義だったが、準備も進行もおおむね順調に行うことができ、興味深い講義の内容を味わいながら仕事に臨めた。特に、文書を資料として分析を行うことが多い私にとって、地図や絵画、船や陶器といったモノを使ってどんな研究ができあがるのかを、目の前で具体的に見ることができたのは収穫だった。それで写真撮影や講義記録にも自然と熱が入り、楽しく、オイシく仕事させていただいた（感謝）。この講義録にその雰囲気が反映されていれば光栄である。もう一つ、講義以外で私を開眼させたのは、学生の聴講アンケートである。新しい研究成果について「すでに予備校で習った」と書いてあったり、講義中のある言葉について想像たくましく講義内容からかけ離れた感想が記されていたり…自分との世代の違いを感じつつ、ここに内在する千差万別な思考から将来どんな研究が生まれるのか楽しみに思った。今後とも、東京大学という場の利便性やネットワークの広さ、そして教養学部という分野の多様性を存分に活かし、おもしろい講義が数多く開かれることを願っている。(TA・小川唯)

# 協力者一覧

（五十音順）

■担当教員
小島毅（Kojima Tsuyoshi）　齋藤希史（Saito Mareshi）

■EALAI 助手
秋山珠子（Akiyama Tamako）

■EALAI 研究員
小野寺史郎（Onodera Shiro）　門林岳史（Kadobayashi Takeshi）

■講義通訳
林松涛（Lin Songtao）

■英文翻訳
宗村美里（Munemura Misato）

■テーマ講義リサーチアシスタント
新田元規（Arata Motonori）

■テーマ講義ティーチングアシスタント
池田勇太（Ikeda Yuta）　小川唯（Ogawa Yui）

■報告書編集
新田元規（Arata Motonori）　池田勇太（Ikeda Yuta）　小川唯（Ogawa Yui）

■協力
豊田明代（Toyoda Akiyo）

---

2007 年 2 月 28 日発行
東京大学
東アジア・リベラルアーツ・イニシアティブ（EALAI）
03-5465-8835(TEL/FAX)
admin@ealai.c.u-tokyo.ac.jp
http://www.ealai.c.u-tokyo.ac.jp